

浄土

4
the JODO
1993

新法然上人鑽仰会発足記念特大号

随想特集

伊藤桂一 木村久邇典 藤原作弥 佐々木久子
利根川 裕 関 容子 石川喬司 寺内大吉

旅＝国東を歩く

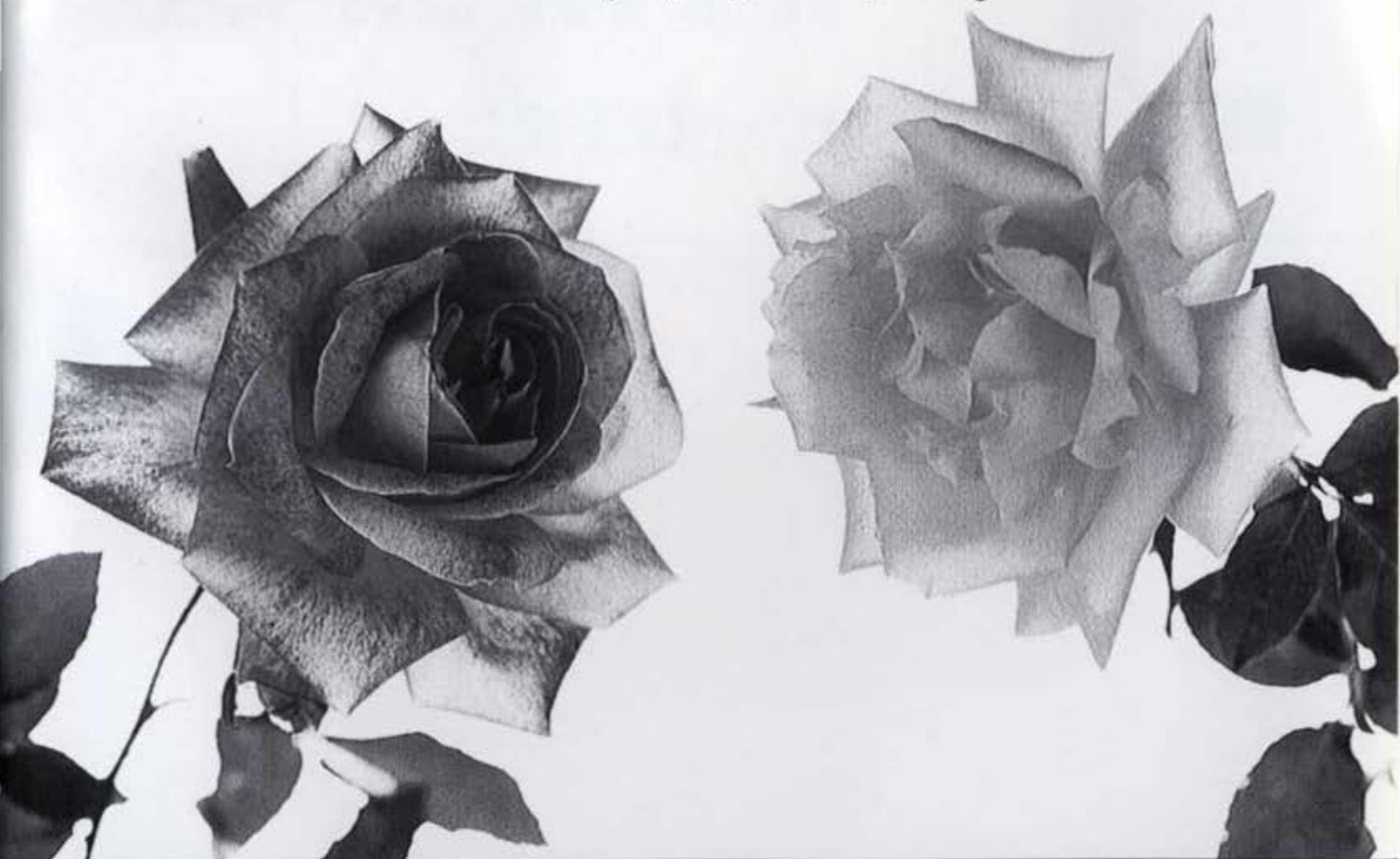


法然上人鑽仰会発行

わかり合うことは、

語り合うことです。

以心伝心。古来から日本では、黙っていて
も心は通じるものといわれてきました。
でも、やっぱり話さなければわからないこ
とってありますよね。もっとお互いがわか
り合えるために。日本テレコム・0088
でゆっくりおしゃべりしてみませんか。



0088なら、もっと気軽に、もっと長〜く話せます。

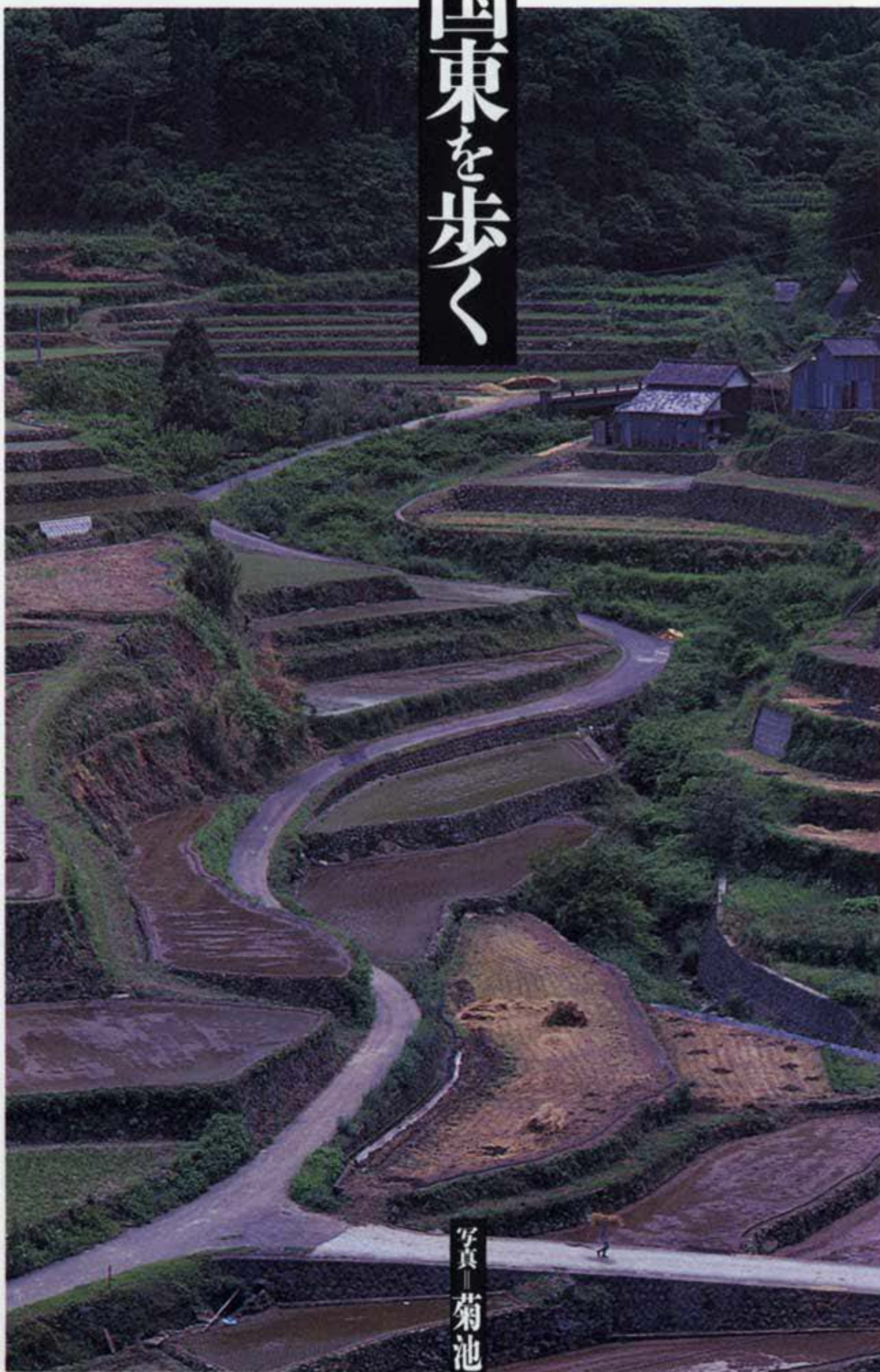
- 例えば、東京(03)↔大阪(06)間なら
25.4%もおトク。
※平日夜7時に15分間電話した場合
- かけ方は、アタマに**0088**を回すだけ。
- かかる費用は**2060円**(税込み)だけ。
月々の基本料金は一切ナシ。
※NTTの基本料金は従来どおりです。
- 電話機・電話番号もそのまま使え、
ご自宅での工事もなし。

安い市外電話

0088

-
0088のことならなんでもお気軽にお電話で。
日本テレコムお客様センター
☎**0088-82**(無料)
または、☎**0120-0088-82**(無料)
●受付時間 9:00~20:00(年中無休)

国東を歩く



国東町・成仏の田園風景

写真—菊池東太



熊野磨崖仏



富貴寺 阿弥陀如来像(重文)



天念寺 川中不動尊



竜岩寺 薬師如来像(重文)



野田・庚申塔

法然上人鑽仰会と『浄土』

法然上人鑽仰会が創立されたのは昭和十年四月のことであります。当時、真野正順先生を中心に多くの先生方が集まって、「仏教復興の将来をどうするか。何をなすべきか、時機相応の教えを現代にどう生かすかなどの議論のなかで、本当に仏教の思想と信仰を社会に、現代に生かすには、真に偉大な、具体的な人格を目標とし、その偉大さを本当の意味で、強く生かさなければならぬ。実践を通して信仰を養うためには、偉大なる人格を師表と仰がねばならない。その偉大なる人格こそ法然上人である」という結論に達し、法然上人鑽仰会が設立されたのです。まず機関誌として『法然鑽仰』が刊行され、「法然上人」のみ名のもと、全国の同信の和合協力によって各地に支部が組織され、僧俗一体となって鑽仰運動が展開したのであります。

その当時、不定期または季刊の信仰雑誌は少な

く、雑誌『浄土』が本会の機関誌としてデビューしたときは、仏教界はもとより宗教界、一般出版界でも大いに注目されました。この『浄土』に文豪佐藤春夫が法然上人の伝記『掬水譚』を、中里介山が『黒谷上人夜話』を連載、その他多くの著名人が執筆、法然上人の崇高なみ教えが縦横無尽に飾り立てられました。「仏教ルネッサンス」という言葉も流行したほどです。

その後、わが国は戦時体制に突入、思想、信仰の弾圧など暗い時代を過ごし、やがて戦後の混乱期を経て今日に至るまで、常夜灯のごとくつづけられてきました。

今回、本会が浄土宗浄業会と合併して、強力に組織化、活性化され、貧者の一灯があかあたる万灯として、時代のニーズに応じた法然上人鑽仰運動を展開しようということになりました。ここに新しく甦る新法然上人鑽仰会と『浄土』にご期待をいただき、一層のご理解ご協力を切にお願いするものであります。

佐藤 密雄
牧田 諦亮

『浄土』特大号発刊の趣旨

新法然上人鑽仰会が発足しましたので、これを記念し、『浄土』も活性の意味で四月号を特大号として、浄土宗の全寺院へお届けいたします。

浄土立教開宗という遺産に寄り掛かり、けだるい眠りにおちている間に、法然上人の本当の叫びや時機相應の教えの何であったかを、私達はうっかり忘れかけているのではないでしようか。

ナムアミダブツこそ、絶望の淵から自由な雄叫びとなって生まれ出た称名念仏であつたはずです。八百年間を経て今日を見る時、その自由とおおらかさはどこへ去ってしまったのでしよう。

雑誌『浄土』は、先師方の新鮮な求道精神と奉仕によって、昭和初頭より今日まで絶えることなく発刊されてまいりました。しかし、時の流れは早く、時代の要求は多様化し、宗教土壤も急激に変化しました。伝統は大切であります。だから脱

皮をはからねばなりません。

人々に応え得る『浄土』でありたい。あなたの待ち望む『浄土』でありたい。

法然教義の大衆化、現代化に向けて、あらゆる分野から法然上人を語り、謳い続ける場をつくりたい。

本特大号は、かなりの気負いと冒険を意識しながらも、純粹にこれらの願いを託して、まず皆様にお届けすることにいたしました。年数回を目標にしております。

この小冊子を一つの契機として、読者をはじめとする多くの方々の結集、あるいは雑誌『浄土』そのものが思いがけない栄養剤となり、明日へのダイナミックな起爆剤の役目を果たせることを期待しているものであります。

ご批判、ご感想、ご投稿をお寄せ頂ければ幸いと存じます。

尚、月刊『浄土』は通常どおり刊行いたします。ご購入下されたくお願い申し上げます。

浄土 4月特大号 目次

巻頭言	佐藤密雄 牧田諦亮	7
-----	--------------	---

随想特集

戦場即浄土の死生観	伊藤桂一	10
山本周五郎と“浄土”	木村久邇典	14
「ホテル」と「ホスピタル」	藤原作弥	18
どうしてモノなの？ どうしてお金なの？	佐々木久子	22
相撲はスポーツでない	利根川裕	26
戸板当世子さんのこと	関 容子	30
内宇宙の浄土	石川喬司	34
美しくも嬉しい夢を	寺内大吉	38

旅

国東を歩く	文とカメラ 菊池東太	42
-------	------------	----

劇作して

法然上人と私	田島 栄	50
--------	------	----

この人

チターに生きる内藤敏子	小川喜一郎	60
「本」の散歩道	齋藤晃道	68
今こそ浄土教	松涛弘道	70
味のつれづれ草		78
会員募集		79
編集後記		80

表紙撮影＝「落日」 城戸博幸

戦場即浄土の 死生観



伊藤桂一

私は昭和十三年の一月に、現役兵として、習志野の騎兵聯隊に入営している。その前年の七月七日に、日中戦争がはじまっている。つまり、その時の私の前途には、暗澹たる未来だけがつづいていたことになる。

暗澹たる未来もだが、暗澹たる私自身の事情もあった。入営前、私は、進学もできず、就職もできず、といって遊んでもいられず、さらに絶望して自殺もできず、実に、行き場のない、どうしようもない状態で、日々を送っていた。

精神的には、地獄にいるような気分だった。世相は、まさに不況が極まっていた、中学を中退した程度の私の働き口などは、東京中、どこにもなかった。家計は、母親が保険の集金係をし、妹がデパートの食堂で働いていた。私は無為徒食、もし行き場が一つだけあるとすれば、軍隊しかなかった。

こうした事情下に、私は軍隊入りをしたのだが、軍隊がいかに地獄的であるかは、いうまでもないであろう。不況の吹きさらしの中の地獄と、軍隊の地獄とどちらがよいか、というと、その時点では、私には軍隊のほうがずっとよかった。なぜなら軍隊は、へたに気を病む必要がなかったからである。

当時、軍隊は二年制だったが、日中戦争は拡大するばかりで、翌十四年の春、私は、新設の騎兵聯隊の一員として、中国山西省の戦場に出

動した。戦場——という新しい地獄の生活が、私を待っていたことになる。もともと、私は二年目の兵隊になっていたし、当然軍務にも馴れていたもので、その点では、過ごしやすい暮らしをしていた。

山西省というのは、全省ほとんど黄土の山岳地帯である。しかし、戦争するために行ったのだから、戦闘のたびに死傷者は出る。元気のいい仲間が、山を越えてくる迫撃砲弾で脳髓をやられ、発狂して、恋人の名を呼びつづけながら次第に息が絶えてゆく、といった現実にはさらされていると、これは何とか考えねばならない、と、身うちからせめぎのぼってくる思いがあった。何とか考えねば、というのは、死生観を樹てること、戦場における安心立命の境地を得ることだった。私は二十二歳で、とにかく何らかの方途を講じねばならなかった。

たぶん、幸いにして——というべきだろうが、軍務に入るまでの数年間、私は文学少年で、投書雑誌に、詩歌の類を熱心に投書していた。稚いながらも文学三昧、不況風に喘ぎながらも、なお絶望の中で己れの節を持し得ていられたのも、文学の勉強に、しがみついていたからである。そのため、黄土の山中で、安心立命を得ようと考えた時、詩的な死生観が、身うちに湧いてきている。

その死生観が、どういうものだったかという

一、戦場生活は運命なのだから、これを、素直にあきらめて肯定しよう

一、そうして、つねに明るく前向きに生きてゆこう、つまり好目的な人生観を持つことにしよう

一、もし、死ななければならなかったら自

分の死ぬ場所を愛し、身近にある草木に魂を預けよう

——と、いうものであった。

私は右の死生観を、私に向けて「これでよいか」と問いかけると、自身のうちで、深くうなずくものがある。この死生観は、万物に精霊をみる、というアニミズムの思想で、根源的には詩歌制作の発想につながるものである。それに私は、天台の寺院の生まれで、幼時に父に死なれたので寺は出たが、精神の形成期に仏寺にいたので、死者生者に対する、祈りのところを体質としてもっている。それで、戦場での死生観も、私なりに、容易（とはいえないまでも）ともかく、納得できる形で、樹て得たのであろう。この死生観を樹てた時、はっきりいえば、死生観を樹てた直後から、ふいに、自身の周辺が明るみを増してきたのである。それまで、なじ

みえない、黄河の風景に、親しみを覚えたし、その黄河の風景の中を歩く自身にも、新しい生甲斐を覚えはじめている。ここは戦場である、けれども自分は戦場を旅しているのだから、戦場というより、戦旅の暮らしをしていると考えたがよい、自分は少くも詩歌を愛する一人である、とすれば、戦旅は吟行である。日々眼にする風景やできごとを、歌に詠んでゆけばたのしいのではないか——といった考え方が、私の身うちに、弾力のあるリズムをもって生まれてきた。そうしてひまひまに即興の短歌を詠んだ。いままでの人生で、私には、地獄的な経験が多かったし、自身も暗いことばかりを考えてきた。しかし、戦場という、もつとも暗い場所で、ふいに、考え方を変え、まわりに、明るくまぶしい世界をみることになった。考え方を変えた、というより、もつと切実な、私なりの、ぎりぎり

の場での、悟りであつたともいえるのであろう。戦場即浄土——といってしまつてもよい考え方が、その時、私の中に、しつかりとあつた、と思う。なぜなら、その時以後、七十五歳になる今日まで、私は、戦場で得た死生観を、そのままこの身に持している。

私は、戦中世代の一人として、戦記執筆の仕事にかかわっているが、これは、死者への鎮魂の仕事であり、また生者を励ます仕事でもある。その仕事の根底にも、当然、私の死生観は作用している。私は、事情で僧籍に身を置くことはできなかつたが、いましている仕事も、僧籍に身を置いているのと同じ意識による仕事である。そう思えば、日々もまた、私なりの、浄土の中に身を置いているような気がしている。私にとつて、戦場は、自身の浄化の場でもあつたのではないだろうか。

(作家)

山本周五郎と 『浄土』



木村久邇典

山本周五郎の晩年の代表作『虚空遍歴』は、昭和三十六年から三十八年にわたって「小説新潮」に発表された。山本は文学青年時代、へ安住を求めるな、この世は巡礼である」と説くス

トリンドベリーや、ロングフェローのへ人間の真価は、かれが死んだとき、何を為したかではなくて、何を為そうとしたかだ」という箴言に深く感動し、生涯、座右の銘とした。『虚空遍

歴』は、この二つを小説として表現しようとした四十年来抱きつづけてきた腹案の試行であった。書き上げて半年ののち、作品の舞台となつた北国街道の寒駅今庄を再訪した山本は、つぎのような感想を書きとめている。

へその業績によつて高い世評を得る者もいるし、名も知られずに消えてゆく者もある。しかし大切なことは、その人間がしんじつ自分の一生を生きぬいたかどうか、という点にかかつているのだ。「黄金でつくられた碑もいつかは消滅してしまう」ということを書いたことがあつた。大切なのは「生きていく」ことであり、「どう生きるか」なのである。／百年のちの知己や名声は、当人にとってまったく無縁なものにすぎない。こんにちを充分に生きる、こと以外に人間の人間らしいよろこびはないのだ」と。

また別のエッセー『人生の冬・自然の冬』で

は、散歩道の途次にある墓地に立ち寄り、なんと、墓石にさえも貧富の差のあるのを見、貧民墓地では不覚にも熱い涙を流しながら、かさ付きて玉垣をまわした儀々しい墓に呼びかける。

へ私は、あのゴージャス（豪華）な、人を見おろすような御影石の墓のほうに振り返る。「きみは死んで墓の下に埋められた」と私は声に出していった、「——にもかかわらず、亡者になつたいまでも、この貧民墓域の人たちに金を貸し、高利をむさぼっているんだらう。いっておくがな、きみには死の安息さえないんだぞ」

みぎの二例をひくまでもなく、山本周五郎は「来世」というものを信じていないようであった。徹底した現実主義者だったといつていい。「親しい者が死んだあとで、ああもこうもしてやればよかった、といつて後悔してもはじまら

ない。人と人とのつき合いは、生きている間だけのものだ。だから人間は、今の今を大切に生きなければならないんだ」と山本はいった。

「芸術は永遠だという。はたしてそうだろうか。たとえば油絵について考えてみよう。絵の具は永久に変色しないか。そんなことはない。年が経てば色も褪せ、乾湿によってひび割れたりする。また名画といわれるものには、絵描きがまだ無名で貧乏だった時代の作品が多いから、絵の具もあまり上等でなくて、保存が悪ければいつそう変色や褪色も早くなる。それにカンバスだって、四千年も経てば、繊維が変質するといふ説があるそうだ。つまり絵画芸術の生命は、複写印刷が進歩したとしても、実物そのものは、決して永遠不変ではない、ということだ。そして、それが、ごく自然なのだとわたしは思う」

山本周五郎は、決して芸術の永遠性などは信じていないようであった。

わたくしの生家は浄土宗で、幼年時代から父母に、よく阿弥陀仏や西方極楽について語り聞かされたものであった。生前に信心あつく、善行をつめば、来世では、阿弥陀如来様のところへ行ける、と両親は説いた。

だが、現世に生きることを第一とする山本周五郎は、つぎのようだったのであった。

「おれが死んだらな、墓もいらぬ、戒名も不要だ。死体は焼いて骨にしたら粉にして海の上へバラ撒いてくれ」

それよりもいっそ、と山本はつづけた。

「仕事が出来なくなったら、どこか人跡未踏の山奥へ入って、ついに遺体も発見されないような、そんな死に方ができたら、しめたものなんだがな。秋の夕陽に照らされて、風呂敷包を肩

から襷がけにして、ひとりぼっち、とぼとぼと奥山ふかく踏み分けてゆくおれの後ろ姿が、現実に見えるような気がするんだよ」

この言葉にも、来世の極楽への到達を願うひびきは感じられなかった。

ものの本によると、**「浄土」**について、つぎのように記されている。

へ仏教思想史上、浄土は、来世浄土、浄仏国土、常寂光土の三種類に分けられる

このうち、浄仏国土とは仏の統括する一切の世界を指すが、とくに現実の世界にポイントが置かれていて、現実世界の浄土化を意味する。大乘經典には、現実の中で仏道実践に励む菩薩の努めとして立てられたものが、浄仏国土であり、ひいては現実社会の中で活動していた教徒によっておこされた大乘仏教で、最初に考えられた浄土ということにもなる、と説明されている。

いささか牽強附会のそしりを覚悟でいえば、山本周五郎は、来世よりも現実の人間生活のなかに、浄土を模索していたのではなかったか、という気がする。

山本の好短編『ちゃん』は、いい腕を持ちながら貧乏暮らしに喘ぐ名人気質の職人重吉とその家族の物語だが、家族全員が重吉の志をまさしく受け止め、心をひとつにして市井のすみで生活の灯を守ってゆく姿を描いている。

作者は、経済的には決して恵まれていない重吉一家に、この世でも現実に存在する**「天国」**をみていたようである。

山本における**「浄土」**がどのようなものであったか、直接に問い質したことはなかったけれども、『ちゃん』で描かれた**「天国」**と、きわめて近似するものではなかったろうか、などと考えてみたりするのである。

(文芸評論家)

「ホテル」と 「ホス。ヒタル」

東京・築地の国立がんセンターに友人を見舞うと、ベッドの枕元に新約聖書と仏經典集とが置いてある。友人は「ああ、これは気休め。本当は落語選集を読んでいるんだ」と笑った。確かに、全二十巻の落語選集がブックスタンドに並んでいる。

「聖書と經典をベッドの脇に置いておくと、ホテルに泊っているような気になるんだ。ほら外国のホテルに泊る。どこでもランプ・スタンドの下に置いてあるだろう？ ホテルでは読んだこ



藤原作弥

とはなかったが、いまは時々、キリストの言葉や釈尊の教えを拾い読みしている」といい、照れくさそうに再度「気休めだけどね」と付け加えた。

友人は血液のガンに冒されていた。一年前、心臓の右心室に腫瘍が見つかった。幸いなことに摘出に成功したが、その後、肺動脈にも腫瘍があることがわかった。だが手術はすでに手遅れと判明、目下、放射線照射と抗生物質投与の診療を交互に受けている。

私はその時、友人が入院している「病院」(ホスピタル)と「ホテル」は宗教に関連した同義語で、末期患者がやすらかな死を求めて入院する「ホスピス」も同じ語源であることを説明しようとしたが、死を意識しているであろう友人に對して失礼にあたるような気がして、やめた。知識をひけらかすような態度もとりたくなかった。

※

私が「ホテル」⇔「ホスピタル」同義語論を知っているのは博識であるからではない。私自身十年前、肝炎で七カ月間も東京・中落合の聖母病院に入院した経験がある。聖母病院はカトリック系の病院で、シスター(修道女)である婦長から初めて聞いて、以来、服膺ふくようしている説だった。

長期入院中に、医師・看護婦・ケースワーカー・患者・家族などのチームワークによる「心

の通った看護」の必要性を痛感した私は、当時の体験を『聖母病院の友人たち』(現代教養文庫)というノンフィクションにまとめたが、それ以来、看護婦さんや新入社員の研修会などで、「ホテル」⇔「ホスピタル」同義語論を説明して「心の通った人間関係」について話をするようになった。

「ホテル」と「ホスピタル」の共通点は、同じ語源の「ホスピタリティ」(温かいもてなし)である。しかし、他人様ひとさまの前で講演するのだから間違ったことは言えない。そこで念のため事前に辞書を引いてみると、これらの語族の起源はラテン語の「ホスぺス」(hospes)までさかのぼる。

「ホスぺス」には、「主人」という意味と「客」という二つの意味がある。「主人」は温かくもてなす人。「客」はもてなされる人だ。その両

者の関係がへホスピタリティ（温かいもてなし）なのである。

つまりへ主人がへ客をもてなす場所がへホテル。昔、旅人が一夜の泊りを求める宿舎がへホテル、病気になった人が心身をいやすために憩う場所がへホスピタル（病院）というわけだ。

事実、へホスピタルは、これもラテン語のへホスピティウム（hospitium）に由来している。この後世病院となる宿泊施設は、中世ヨーロッパにおいてはキリスト教寺院だった。ここから病院の歴史は教会の歴史から派生してきたことがわかる。

こうした沿革史は西洋だけではない。東洋、いや日本の歴史を振り返っても立証できる。例えばへ主人がへ客を温かくもてなすへ宿との関係としては、謡曲『鉢木』はちのきを想起させる。

最明寺（北条時頼）が全国行脚の帰途、上野こうすけの国・佐野で雪道に悩み、一夜の宿を求めたところ、佐野源左衛門が心よく泊めて、愛蔵の梅・松・桜などの鉢の木を焚いて暖を与えてなした話は有名だ。この場合のへホテルは、もし時頼が病人であればへホスピタルとなる。

宗教寺院と病院との関係の例としては、光明皇后の福祉・医療活動が記録されている。夫の聖武天皇は信仰心が厚く、奈良に東大寺を建立、以後、日本全国に国分寺・国分尼寺のネットワークを作ったが、妻の光明皇后は悲田院・施薬院などの病院を建て、病人を収容し、困窮者を保護した。

もともと仏教寺院が病院の性格をも備えていることは、どの寺院にも薬師如来像がまつられていることでも自明だろう。如来像がその手に薬壺を持っているのは衆生の病苦を救い、無明

の痼疾を癒した故知を具現した姿なのである。

※

次に築地の国立がんセンターに友人を見舞ったとき、彼はどこで誰から得た知識なのか「ホテル」と「ホスピタル」との関係をすでに知っていた。

落語好きの彼らしく「ヘホスト」の女性名詞が「ホステス」。もともとは「主人」に呼応する「女主人」の意味だったが、現代日本語ではいつのまにか銀座・赤坂のバーやクラブの接客女性の意味だけになってしまった。なるほどラテン語の原義どおり、どっちがもてなす側でどっちがもてなされる側かわからない筈だ」とオチをつけてみせた。

彼はついでに「ヘサービス」という言葉の意味を説明してくれた。動詞形の「serve」は、もともと「神に仕える」が第一義。「奉仕する」「給

仕する」は第二義。これも宗教に根ざした言葉だった。

いま名詞形の「service」を英和辞典で引いてみると、①勤め、奉職、奉公、雇用、②服務、行政、職業、③軍務、兵役……とあり、最後の④にようやく、礼拝、勤行、典礼……と出てくる。

「いずれにしても「ホスピタリティ」も「ヘサービス」も本来は宗教上の無償の行為。今度、銀座や赤坂のホステス嬢たちに会ったら愛は惜しみなく与えることを教えてやらなくちゃ」と友人は笑って言った。

枕元の聖書と經典集に触発された「ホテル」「ヘホスピス」の語源談義から始まった友人の「わか勉強は、いつの間にか本物になってきたようだ。彼はいまでも一所懸命に闘病生活を送っているが、見舞うたびに新しい発見の成果を話してくれる。」
(エッセイスト)

どうしてモノなの？ どうしてお金なの？



佐々木久子

いやーな事件が、次から次へ起る日本である。ここ十年来、日本は狂いはじめている。

モノがあふれ、物質文明に毒された日本人は、眼の色を変えて、カネ・金・カネである。

昨今の不況は、バブルのせいだ、というけれど、それは違うと私は見ている。

三十八年という歳月を、日本じゆうを歩きつづけた私は、もう十年ほど前から、これは大変

だ、日本は收拾のつかない状況に追い込まれてゆくぞ!!と強く感じていた。

第一、地方の町や村の自治体が、企業体の真似をして、どこもかしこも金儲けをはじめていることに驚かされた。

町おこし、村おこし、という名のもとに、これでもか、これでもかと、お金を儲けることにウツツを抜かすサマは、まさしく狂っている

しかいいようがない。

いきなり、漬けものや味噌だけで金が儲かると短絡的に考えること自体が笑止である。

ふるさと創生資金の一億円がバラまかれてから、温泉を掘ることが大流行した。

隣の村に温泉が出たのだから、うちの町に出ないはずはない、とばかりに、掘って掘って掘りまくる。

あげく「出ない」ところも多い。

たとえば、温泉が出たとしても、たちまち大観光地になって、人がワンサワンサとくるとソロバンをはじくことがおかしい。

日本は、火山列島である。

掘れば湯も出るだろう。でも、それは地下のマグマが動いている、という証しである。ということは、普賢岳のように、どこが大爆発するかもわからない、という天の啓示である。

日本じゅうをまるで宝の山を掘り当てようとするかのように、掘りまくることに私は身の毛のよだつような恐ろしさをおぼえている。

モノとカネに取り憑かれた欲ぼけ亡者どもの無神経さに怒髪天を突く思いなのは、私だけなのだろうか。

また、この出口のない不況について、大企業の経営者たちは、見通しを誤ったのは大蔵省の役人のせいだ、とか、銀行関係者が悪い、とか、すべて他人のせいにして、ふんぞり返っておられる。

飛んでもない話だ。

これでもか、これでもかと大量生産して、売りまくり、しっかりお金を儲けておきながら、そのツケがきたら自分たちのせいではない、と仰言る。

大量にモノを作れば余るにきまっている。日

本じゅうはおろか、世界のあちこちに売りまくってモノをだぶつかせた。

どんな山あいの里に行っても、漁村に行っても、同じものがズラリとあって、余りかえっている。

なのに、まだ大量に作り出して、派手な宣伝をやって売りまくろうとする。

どこの家庭にも、三年分や四年分、いや十年分くらいのモノが余っている。

中には、死ぬまで使っても使いきれないほどのモノもあるのだ。

新しいモノは必要はない。それどころか、狭い家である。とにかく、どうやって整理したらいいかと、困り果ててもいるのだ。

あまりにもモノがあふれすぎている日本で、私たちは、もうアキアキしてしまった、ともいえる。

繁栄しすぎた平和の中で、うみ疲れアキた人間は、ともすれば凶悪性を発揮し、残酷になつてゆく。

マット殺人事件、洋弓でカモを射った事件、十歳の娘が母を惨殺し裸体にして捨てた事件、そして、NHKのやらせドキュメントなどは、人間としての常識や倫理感が完璧に喪失していることを証明しているともいえよう。

加えて、マスコミの異常な報道ぶりも度をすぎている。

貴ノ花関とりえさんの婚約破棄をめぐる一連の報道は、寄ってたかつて引き千切ったともいえよう。

そして、若い二人の後で蠢めく汚ない打算。ここにも欲に狂った大人たちの見え見えのソロバンの音が聞こえている。

実に腹立しい限りである。

私は、野球も相撲もサッカーも大好きで、よく見にゆく。

貴ノ花関への凄じいばかりの女性ギャルの右往左往ぶりと黄色い声援には圧倒される。それは若い女性ばかりでなく、私のような婆ギャルも興奮しているのだから、マスコミが嫉妬したのだと思う。

若さのない中年の男たちは、貴ノ花に、あの可愛いりえを取られてたまるか、という嫉妬で動いているように思った。

その逆は、巨人の長嶋監督への、これまた異常とも見える熱愛報道ぶりである。

今のマスコミのデスクや、部長クラスは「長嶋選手」と共に青春時代をすごしている連中である。

長い間、文化人ふうであつた長サンが巨人に戻って来た、というので、いやもう、見ておら

れないほどの過熱した報道をやり、毎日のようにスポーツ紙の一面は長サンである。

十二球団もあるのに、NHKまでが巨人長嶋ばかりをテレビに映している。

これで、シーズンがはじまり、巨人が負けたら、どういう報道をしよう、というのであろうか。

この国は、たしかに狂っている、としかいいようがない。嘘やごまかし、建前ばかりの政界をはじめとして、今こそ、みんなが本音で、まことをぶつつけ合う姿勢を見せないと、日本はますますおかしくなつてゆく。

モノではない。お金でもない。まことの心と、まことの情である。ひとりひとりが反省して人間として地についた生き方に立ち還らなければならぬ、と私は考えているのである。

(随筆家)

相撲は ス。ホーツでない



利根川 裕

かつていた神

相撲ブーム、という。たしかに、その通りなのだろう。

が、わたしが少し自分の年齢を背伸びさせて古老のような口のききかたをすると、いまどき

ブームと違った大ブームが、かつてあった。

双葉山時代である。双葉山の全盛期は、ちやうど日本が海外膨張政策にうつつを抜かしているところで、そういう国威宣揚と国技相撲とがびたり一致して、国をあげて相撲に熱中しているという時代的背景があった。が、そういう事情

を越えて、双葉山はやはり特別の英雄であつた。彼の作つた六十九連勝は、以後半世紀を経たいまに至つても、まだ誰も破つていない。

そのころ、わたしは、むろん子供であつた。メンコ遊びが面白くてしょうがない子供であつた。力士の顔を描いたメンコが大流行で、メンコのうえで、玉錦が勝つたり、武蔵山が負けたりする。自分のメンコを強くしたいから、子供たちはそれぞれメンコに細工を加える。裏に蠟を塗つたり、もう一枚の紙を裏うちしたり。フエアではないが、勝たねばならぬための工夫である。

が、双葉山のメンコには、こんな小細工をするのを、どうもためらつた。これは、わたしばかりではない。べつだん誰がとり決めたわけでもないが、みんなが双葉山のメンコには手を加えなくなつた。が、そういう双葉山はやはり負

けてしまう。そのうち、双葉山が登場しなくなつた。双葉山が負けるなんて、あつてはならないからである。こうして子供たちは、それぞれ双葉山を持つていながら秘蔵することになった。メンコ勝負から家へ帰ると、秘蔵の双葉山をとりだして、ちよつと崇高な気持になるのである。双葉山は、そういう神であつた。双葉山が神だつたのは、不敗だつたからだけではない。双葉山には精神の美学があつた。それがテレビのないラジオ情報を通じて、みんなの胸に伝わっていた。片田舎の子供にも、それははつきりと分つた。

双葉山は、そういう神だつた。この神が日本中を熱狂させた。双葉山が七十連勝ならず敗れた日、日本中が喪に服しているように静まにかえつた。

負けた翌日の新聞に、双葉山の「信念の歯車

が狂った」という言葉が載っていた。まだ子供だったくせに、わたしはその言葉を、神の人間宣言のように、悲しく受けとめた。

双葉山は、むろん神ではない。が、人びとは、神と呼んでもいいような、限りなく神に近いものを双葉山に託していた。また、託されるにふさわしい双葉山であった。双葉山には、そういう神話形成力があつた。いわば、日本中が双葉山神話の信者であつた。そういう大ブームが、かつてあつたのである。そして、その後はもうこういう現象はない。

開国が攘夷か

いまの相撲ブームを作りだしている何割かの力は、貴花田改め貴ノ花の存在であろう。わたしも、この二十歳の力士を大いに轟（おどろ）にしているが、彼はまだまだ、とても双葉山のスター性

には及びもつかない。英雄や神でないのはむろんのこと、スターとも呼びにくい。まだアイドルである。

それはともあれ、数場所ぶりに横綱が誕生した。初の外国人横綱ということが、マスコミの絶好の話題になっている曙である。

ハワイに生れ育った一青年が、日本でもともに保守的で閉鎖的な社会にとびこんで、実力をもつてその最高位に昇りつめた。このことをペリー来航以来の事件と称した人もある。

曙の横綱昇格とともに、外国人横綱の是非論もまた問題となった。いうならば、開国が攘夷か、ということである。

もつとも、曙その人はこれらの議論の責を負う立場にはない。彼は相撲社会に入門し、そこで努力を積み重ね、この社会の昇進ルールに従って横綱になったのである。

相撲協会が外国人を入門させたという時点で、論理的にはすでに攘夷論は成立しなくなっている。入門はさせたが横綱にはさせない、というのでは筋が通らない。だから、そういう差別による攘夷論は、正面切って主張するわけにはいかない。

にもかかわらず、かなりの日本人の心情のどこかに、外国人横綱に釈然としないもののあるのも事実であろう。

開国派、国際派は、スポーツに人種や国籍の別はない、という。それはその通りである。

が、相撲というのは、はたしてスポーツなのだろうか。わたしは、スポーツでない要素のたいへん多いスポーツと理解している。歯切れよくいえば、スポーツではない、と理解している。

力士は髷を結っている。金糸銀糸で刺繍した化粧まわしを締めている。仕切りには、水を含

んだり、塩を撒いたりの作法がある。そして横綱土俵入りという芸事がある。これらは、スポーツ一般のユニフォームやルールとは異なるものである。神事に根ざす芸能的様式である。

スポーツや芸能の発祥は、古代ギリシアのオリンピックがそうであるように、もともとは祭典的行事であつた。それがやがて祭典と離れてスポーツや芸能として独立してゆくが、そういう発展史からいえば、相撲はまだ祭典ばなれしない競技である。相撲はスポーツではない、というのは、そういう意味である。

そしてわたしは、相撲は相撲であつて、なにもスポーツにならなくてもいいと考えている。スポーツでない競技があつてもいいではないか。わたしは、そういう保守派である。

だから根本的には、相撲協会が外国人を入門させることに反対なのである。

(作家)

戸板当世子さんのこと



関 容子

この一月二十三日、戸板康二先生が亡くなった。前夜まで銀座に出て、昨年十二月の先生の
 長寿を祝う会の裏方をつとめた文芸春秋の編集
 者たちをねぎらったそうだから、まったく突然
 のことだった。

桐ヶ谷の霊源寺で行なわれた本通夜の席で、

私は激しく胸を突き上げられる光景に出会った。
 それは喪主の当世子^{とよこ}さんが、あとからあとから
 訪ねてくる各界の著名な焼香客に目礼を返すこ
 とも忘れたように、祭壇に飾られた夫の遺影を、
 じっと見つめ続けていたことだった。先生の写
 真は、多分二十年くらいは昔のものらしく、

「この写真じゃあ詐欺になるかしら」

と、仮通夜の際に奥様がさんざん迷っていたものが、結局使われていたのだった。

戸板先生と奥様は、お二人の父親同士が兄弟という、非常に近い従兄妹だという。

当世子さんの家は神戸だったので、学生のころの先生が休みになると東京からよく遊びに来て、五つ年下の少女に読書指導などをしてくれた。

当世子さんには二つ年上の姉さんがいたそうだから、

「本当はこの姉となら、三つ違いの兄^{あに}さん……ということになって、歌舞伎好きの康二氏は丁度よかったと思うけど」

と奥様は言うが、もちろん本気ではない。

当世子さんが十七、八になったころ、東京でお祖父^{じい}さまが亡くなられた。先生にとっても祖

父なわけだから、葬儀の事務一般を若い先生がかなり取り仕切っていて、上京した当世子さんがその助手をつとめることになった。

「あとから思うと、あのときに私との結婚を考えたみたいなの。ね、そうでしょ？とつい最近訊いてみたら、そうだ、って言っていましたから」

結婚の申し込みは、その葬儀から間もなく、直接本人あてに手紙で来た。開封して書き出しの一行を読んだだけで、それがどんな手紙かわかり、当世子さんはすぐに二階の自分の部屋に駆け上がる。

ドキドキしながら何回も繰り返してそれを読み、やがて火照った頬を手でおさえながらゆっくりと階段を降りて来て、何事かと娘を見つめる両親に向かって打ち明ける。

「康ちゃんが結婚しよう、って言ってきた……。」

真面目で勉強家の親戚の好青年からの結婚話

はすぐにまとまり、当世子さんは二十歳で、晴れて戸板康二夫人となる。

「おかしいのはね、いかにも律気な戸板らしいの。私に手紙で申し込んだとき。私の姉はまだ縁談が決まってなかったの。そしたら、あなたを差し置いて妹のほうに申し込むのは悪いけど、って、ちゃんと姉にも手紙を出してるの。」

私が先生御夫妻を知ったのは、まだほんのここ十数年のことだけれど、いつ見てもその仲の良さが爽やかだった。

あるとき、奥様が仕立ておろしのお着物を初めて着て御披露に及ぶと、先生は満足そうにパチパチと拍手をなさっていたし、また別の日にお邪魔していたとき、ガス工事の人が帰って、やっと今夜からお風呂に入れる、と奥様が大喜びして出てくると、先生が握手を求め、何度も何度も奥様の手を握った。何となく岸田国土の

一幕物に出てきそうな無邪気なインテリ夫婦の雰囲気があつて、温かく幸せな眺めだった。

「本当に、五十年もよくじゃれ合つて来たものよ。冗談で、別れましようかなんて言い出して、でも私たち親戚だから、御法事でもあればすぐに顔を合せてヨリモドね、なんて」

ヨリモドとは、縊を戻す、の略。

もっと喧嘩になると、奥様は座敷の端と端に、夜具を離して敷くという。蒲団と蒲団の真ん中に畳が出る。それを指して、

「ほら、『妹背山』……。」

先生が吹き出して、喧嘩は終る。つまり、『妹背山せやまおんなていさん婦女庭訓』山の段の舞台は、まん中に広々と吉野川が流れ、その両側に家同士のいさかいから結ばれない若い男女の家がある。それを、離して敷いた夜具になぞらえるのは、いかにも戸板夫人らしい洒落っ気だ。

ちよつと脇道にそれるけれど、戸板先生が慶応の学生のころからの親友に、池田弥三郎先生がおいでになる。お二人がよく銀座で飲んでいらしたころ、池田先生が京子さんとか洋子さんとかいう女性に少しお熱だったことがあるそうだ。戸板先生が、バーの別の席で、仮りに女優の香川京子の話をしていた、としておこう。すると池田先生が聞き耳を立ててこつちを向いた。戸板先生はニヤリとして、

「京子と聞いて振り返り……だね。」

この洒落は、もちろんすぐに通じて大笑いになったというが、その翌晩もまたお二人は同じバーで顔を合せた。

「昨夜の君の洒落を、今日学校で言おうとして、『賤械帯』^{しずはたおび}という長唄に『狂女と聞いて振り返り』という文句があつて、それを京子に引っかけて……と長々と説明しているうちに相手も僕

も、何だか気が抜けてしまつてね」

と、池田先生が嘆いたそうだ。

十三年前、戸板先生は大病をなさつたが、池田先生のお世話で慶応に入院して難しい咽頭の手術を受けた。その直後に、何かの会合で私は池田先生にお目にかかったが、

「戸板君の奥さんがあんなに心配して取り乱す姿を見て感動したよ。僕が病気をしたら、家内もあんなにしてくれるかなあ」

と、しみじみおっしゃっていた。

間もなく急逝なさつた池田先生に比べて、戸板先生は十何年も長生きだった。

お通夜の席で、ひたすら遺影に見入っていた戸板夫人のある一途な姿を、もし池田先生が御存命で見えていたら、きつとまた同じようにして、親友の夫婦仲のよさに満足なさつたに違いない。
(エッセイスト)

内宇宙の 浄土



石川 喬司

のNHKテレビの『青春ふるさと紀行』という番組で久しぶりに帰郷したとき、すっかり忘れていた幼い頃の恐怖体験を思い出した。

ぼくが生まれたのは愛媛県の伊予三島で、幼稚園の途中までそこで過ごした。その幼稚園に入園した日のことである。付き添いの母親から離されて園児たちだけが一堂に集められて間も

なく、ぼくは突然激しく泣き出し、それにつられて他の子も泣きはじめた。保母さんになだめられて、やがて他の子は静かになったが、ぼくだけはいつまでも泣きやまなかった。手をやいた保母さんが母親を連れて来ても、ぼくは「違う！ 違う！」と叫びながら泣きつづけた……。

その幼稚園はお寺の境内にあり、園児たちが

集められた部屋には、地獄極楽図の襖画が飾られていた。実をいうと、ぼくにはそれが怖かったのである。もちろん生まれて初めて母親から離されて他人の中へ放りこまれた心細さもあつたけれど、肉身との別れが即怖い血の池針の山の地獄に結びつく、といった思いに深くとりつかれてしまったのだった。

NHKのスタッフと半世紀ぶりに訪れた幼稚園はすっかり様変わりしていて、地獄極楽図の襖画は見当たらなかったが、そのときの怖さは、時を超えて鮮やかに蘇ってきた。思えば、あれが異世界という観念との最初の接触だったのかもしれない。

もうひとつ、その帰郷で忘却の霧の中から浮かび上がってきた光景があつた。それは生家の近くの路傍に建っていた古い石の道しるべである。生家はもう無くなっていたが、道しるべは

風化しながら今も残っていて、そこにはこういう文字がかすかに読み取れた。

へへんろみち――

四国八十八カ所巡礼の六十五番札所・由霊山三角寺が近くにあり、わが家はお遍路さんの通り道に面していたのである。お遍路さんのことを幼いぼくらは「おへんどさん」と呼んでいた。ユウレイ山サンカク寺へ向かうオヘンドサンの姿は、子供の目には五体満足でない気の毒な人というふうに映り、幼稚園の地獄極楽図につながる底深い恐怖を絶えず呼びさましたものだった。へへんろみちという五文字の素朴な道しるべに再会したとき、ぼくの胸にうずくものがあつた。

その一方で、お遍路さんについてのまったく矛盾したイメージもまた残っている。たとえば、初夏の瀬戸内海沿いの夏ミカンの実る丘の道を

涼しげに鈴を鳴らしながら行く菅笠手甲脚半の巡礼姿。それはまさしく聖なるもの極樂的なるものを連想させずにはおかなかった。そうしたイメージの背景には、白砂青松ののどかな海を見下ろしながらお遍路さんが少憩をとる峠の無人の茶店の張紙をひるがえす爽やかな風の匂いがあつた。張紙には限りない人間信頼をこめた朴訥な字でこう書いてあるのだ。――「食べなさった品物のお代はお金があれば下の箱へ入れてくだされ」

小学生のころから興味を持ちはじめたSF(當時はそんな言葉はなかったが)の源流のひとつに《ユートピア物語》があり、ユートピアの原義は「どこにもない場所」だと知らされたが、ときどきあの茶店のあつた場所はもしかしてユートピアではなかったか、と考えたりする。

ユートピア物語の系譜をたどるとき、誰もが

一度は悲觀的な気分には陥るだろう。プラトンの始まりトーマス・モアやベーコンを経てペラミ、モリス経由で現代SFにつながる理想郷の夢は、結局は実現不可能な夢というふうに変化していくからである。SFはその「どこにもない場所」を科学技術の無限の発達によって作りだそうと試みたが、それは逆に明るい未来の代わりに悪夢にみちたおぞましい未来の恐怖を呼びさます《ディストピア物語》の氾濫をもたらしたただけだった。逃げ道は遺伝子の操作による人間性の改変か宇宙の彼方にしかない、というのでは、あまりにもお粗末すぎるだろう。

そうしたディストピア物語の最新傑作に半村良の『妖星伝』全六巻がある。題名の妖星というのは地球のことである。われわれの住んでいるこの惑星は浄土からは程遠く、血の臭いに満ちている。すべての生き物は生きていくために

他の生き物を殺して食べなければならない。なぜそんな悲しい宿命になっているのだろうか？理想の浄土はいつたいどこにあるのだろうか、そんなものがはたして存在するのだろうか？というのが、この大作の基本テーマである。

この物語の最後が、仏教思想による宇宙遍歴の趣向になっていて、宇宙の秘密を解明するキーワードとして、例のアインシュタインの「E=mc²」の代わりに般若心経の「色即是空」が提出されているあたり、きわめて刺激的で興味深い。

もちろんユートピアすなわち浄土というわけではない。浄土のイメージは人間臭いユートピアを超えている。浄土について語る資格などばくなどにあるはずはないが、それについて考えるとき、まず心に浮かぶのは、それが外部に存在する実在の世界ではなく、内宇宙にひろがる可能性を持った蓋然世界がいぜんではなからうか、と

いうことである。

悲しいことに、人間年齢を取るにつれて、無垢の心とか無私的愛とかいったものを信じられなくなってくるもので、とりわけばくなどすべて物事の裏側を疑わないとおさまらない習性がないものとして、亡くなった母親の無償の愛情の記憶だけは豊富に残っている。その母親から、嫁入りのとき、馬車に揺られて、あのお遍路さんが休憩する無人の茶店のある峠を越えて来た話を、何度も何度も聞かされた。いまのばくには、それが浄土の一光景のように霞んで見える。

幼稚園の入園の日にはくが泣いたのは、そうした母親から離されて、つまり浄土の夢から遠ざけられて、これからスレッツカラシの大人に成長していく予感に脅えたせいもあったのだろう……。

(作家)

美しくも 嬉しい夢を



寺内大吉

犬の寝ごとを聞いたことがあるか。

当然のことだが、私も未だ聞いた経験がない。

ここに十歳以上も年下の友人がいる。奥さん

に逃げられ、子どももいないところからヤモメ

暮しである。あまり美形ではない雑種の犬と同

棲中である。同棲ばかりか細君が不在になった

ダブルベッドで同衾をしているらしい。ただし

このシンタロー（犬の名）はオスだからご心配

なく。

「シンタローの奴、よく寝ごとを言やあがるん

だな」

「犬の寝ごとか……どんな言葉で」

「そりや人間みたいにこまごましたことは言わ

んよ。低くうめいたり高く叫んだりするんで、

意味がわかるんだ」

「夢をみてウナされるってわけだな」

「そういうことだ」

「犬や猫はたくさん夢をみると聞いていたが、
いったいどんな内容なんだろうな」

「そりや人間と同じで、恐ろしい夢と嬉しい夢
だろうよ」

私ども犬夢論はその「嬉しい夢」へきて、ゆ
きどまりになった。

恐ろしい夢はわかる。それにおびえた寝ごと
やウナされぶりもわかる。

嬉しい夢——その内容は何か。食べきれない
ほど御馳走を並べられた夢か。

犬は人間ほど食いしん棒ではない。ある一定
量を摂取すると、あとは絶対に食べない。だか
ら犬の社会に消化器の病いはないそうだ。とな
ると、御馳走を並べられて、ガツガツ嬉しいが
なんてあり得ない。

「その嬉しい夢をみているときのシンタローは

どんなだね。どんな表情をし、どんな寝ごとを
つぶやくんだね」

私は友を追及した。友は悲しげな顔になり、
ねたましげに、

「あんな心地好さそうな顔つきってないな。安
らかなお仏像を思わせる。そして、鼻唄でもう
たっているように、くんくんとリズムカルに呟
きを洩らすんだ」

「それで、眠ったままかい」

「そりやあんだ、昏々と熟睡よ。こっちは寝顔
を眺めていると、うらやましくて眠れなくなっ
てしまう」

犬の夢や寝ごととは、そんなに素晴らしいも
のだったのか。

これにひき比べて人間の貧しさよ。追いか
けられる恐怖とか、高所や閉所に身を置く恐ろし
さを夢にみる。恐怖から解放された夢と言え、

飢餓やセックスの渴きばかり。

誰かが述懐した。

「夢をみる楽しさ、あれは嘘だよ。楽しいのは寝床へはいり、両の瞼が重くなってまさにかさなり合おうとする瞬前の全身がトロけてしまいそうな感覚——あれを夢と認定したがっているだけだよ」

たしかにそうであろう。でも、そうとばかりは限らない。

法然上人が「ある夜、夢見らく」と『四十八卷伝』（法然上人行状図絵）の第七卷にある。夢の内容は詳細を避けるが、法然が専修念仏へ開悟した“心の師”中国の善導大師と対面したのである。生年は五百余年も隔たり、遠く中国の長安（現西安）に住した先輩とめぐり会い、法然は欣喜雀躍した。

さらに『四十八卷伝』はこの「夢感対面」の

あと、法然が極楽浄土の実相を夜ごとの夢ではつきりととらえてゆくさまを活写している。建久九年（一一九八）正月、別時念仏中のことで法然は六十六歳。「三昧発得」と呼ばれる奇瑞である。

いや、奇瑞などという他動的なものではあるまい。「生けらば念仏の功つもり」成った常ひごろの心行動が、こうした夢を、永遠の世界を招き寄せたにちがいない。

犬ではないが、純一無雑なる生きざまが、美しい彼岸を透視させてくれたのである。南方熊楠は格別に仏教信者ではない。植物学、民俗学、地政学など広く人文科学全般に通暁した学究である。ことに外国語への理解力は当時右に並ぶ者のいないほどであった。

昭和十六年（一九四一）の十二月、太平洋戦争へ突入する直前に生涯を閉じた。死の数日前、

熊楠翁は毎日かよつてきてくれる主治医に言った。

「先生、明日からはもう来て頂かなくても結構です」

「なぜですか」

「音楽が聞こえてきました。妙なる音楽がね」

極楽浄土からの美しい音楽であろう。

それでも医師は毎日やってきたが病人の前に姿を現さなかった。言葉どおり数日後、熊楠翁は安らかな往生を遂げていった。

常ひごろ、特別な宗教行為はしなかったが、内側に秘めた強い来世を信じる思いが死を眼前にして浄土の妙なる音楽を耳底で聞きとらせたのであろう。

夢とか、聴覚や嗅感——これは理智や思索などの廻りくどい操作を超えて純粹な働きをする。おそろく遠い昔、来世を夢見た人たちもこの純

粋な心の周波で美しい世界をスクリーンにとらえたにちがいない。

しかしその純粹さは、国境を超え、肌色の違いや文明の高低を克服して万人に共感を呼んだのであろう。

万人が共感したものの。それは客観的な事実となつてひろがつてゆく。

日夜、つまらない夢にウナされている私たちが。じつは私たち自身の内側にもっと強い貴いものが内在していることを確信し、一度でもいいから楽しくも嬉しい夢が見られる日を期待しようではないか。

脳死状態になつて、昏々と救急治療室のベッド上に仰向く人。すでに「死んだ」と認定されるかもしれないこの病人。じつは限りなく美しい夢を見続けているのではないだろうか。

（浄土宗宗務総長・作家）

国東を歩く

写真と文 Ⅱ 菊池東太

私は中学、高校の少年時代を北海道で過ごした。

黒の詰め襟の学生服にブツ靴、白の布のカバンを肩からぶらさげた格好で通学していた。女生徒は紺のセーラー服にひだのたくさん入ったスカートに白いリボン。顔見知りの悪童たちとは取っ組み合いのけんかもしたが、知らない人の前では、借りてきた猫のようにおとなしくて真面目そうな顔をしたものだった。純情な時代だった。

野田石仏群



それから二十数年の年月が過ぎ去った。

ある日、カメラを担いで国東にでかけて行つた。そのほぼ中央に並石という集落がある。その道をとろとろと車を走らせていた。学校の下校時間らしく、向こうから中学生らしい生徒たちが三三五五連れだつて歩いて来るのにでくわした。紺のセーラー服に白いリボンをなびかせたのやら、黒の詰め襟のイガグリ頭も見えた。一人一人の顔がは



並石

つきりと見える距離まで近づいたころ、そのうちの何人かがペコリとこちらに向かって会釈をした。バックミラーを見たが私の車の後ろには誰もいない。間違いなくかれらは私に挨拶をしたのである。

私はあわてて会釈を返した。まるで私の少年時代がそのまま、突如として目の前に現れたような気分がした。ごみごみした東京で二十年余りものあいだ生活しているうちに、ひとに素朴に反応する、挨拶するということを、いつの間にか忘れていた自分に気がついた。

ほのぼのとしたいい気持ちになっていた。私はこの体験からくる、ほのぼのとしたイメージをずっと背負い続けたまま、この後十数回、国東に通い続けることになる。だが、そのイメージをぶち壊すようなことはその後も起こらなかった。

国東は九州北東端にたんこぶのように突き出た半島である。奈良、平安時代には来縄、田染、伊



田染耶馬

美、国前、武蔵、安岐に分かれ、宇佐神宮の神領地とされていた。この六郷に本山から末寺までふくめて六十五カ寺が建立され、それを六郷満山といっている。

半島の広さは東西三十キロ、南北三十五キロに及び、そのほぼ中央部に両子山（ふたこ）（海拔721メートル）、文殊山、千燈岳、黒木山、伊美山、屋山などの山々が円を描くように並んでそびえたっている。

それらの山の間から発生した谷には畑が階段状に造成され、それが放射状に海岸線までのびている。

中部から南部にかけて凝灰集塊岩が風食されてできた奇岩が林立した地帯がある。香々地町の東部の夷谷、大田村から豊後高田市の間にある田染耶馬などは、さながら中国の桂林をほうふつさせる奇景だ。

国東には磨崖仏、板碑、仏像など数多くの石で造った文化遺産が残されている。寺の山門によく



六郷満山の行者達

ある仁王像は、普通は木彫だが、国東の仁王像はそのほとんどが石造だ。

夷谷の東に応暦寺という仁聞菩薩にんもんの開基と伝えられている寺がある。平安から鎌倉期にかけて六郷満山中山本寺として栄えた。その境内によちよち歩きの子供の背丈ぐらいの仁王像があった。石板にレリーフされた素朴でユーモラスな趣のある仁王像だ。

仁王像としては代表的なものの一つとされる、奈良の東大寺の南大門の像は忿怒の顔容と隆起する筋肉で力感あふれるものがあるが、この応暦寺のはその雰囲気はかなり異なっていた。

確かに右手には金剛杵を持ち、左手を腰に当ててはいる。吊り上がった目を見開き、口を開けてもいる。がしかし、やせ細ってはいないがアバラ骨の浮きでた胸、筋肉があまりついていないぎこちのない両腕、中年のようにぼつてりとでた腹。



応曆寺仁王像

のんびりとした国東の田舎道をふらふらと歩きながら、その風景にびったりとはまった応暦寺の仁王像に出会ったのは格別の味があった。



富貴寺仁王像

石板レリーフの仁王像はほかにもあった。半島の北にある国見町の南部、伊美川上流に千燈寺という、これも仁聞菩薩の開基と伝えられている寺

がある。ここから一キロほど東、不動山の中腹に千燈寺跡という県の指定史跡がある。雑木林のなかの荒れはてた空き地に本堂跡があり、その入り口にあたる場所に、二メートル近い大きな一枚岩に彫られた一対の仁王像が大見えを切って突っ立っていた。

これも忿怒の形相には違いないのだが、どこか暖かみが感じられた。

国東半島の南西部に豊後高田市がある。半島内では杵築市に次ぐ町である。その東部に富貴寺という、これもまた仁聞菩薩の開基と伝えられている寺がある。一般に路の大堂と呼ばれている本堂（阿弥陀堂）は平安後期の建築で国宝に、本尊の阿弥陀如来坐像は国の重要文化財に指定されている。

この寺の仁王像は石造ではあるがレリーフではない。山門の両脇に阿形と吽形が立っていた。これは応暦寺や千燈寺跡の仁王像に比べるとユーモ

ラスな感じは少ない。だがアバラ骨のでかた、左腕の形は応暦寺のそれとそっくり、私には瓜二つに見えた。



千燈寺仁王像

国東で最も大きいといわれる仁王像は両子寺にある。この寺も前例にもれず仁聞菩薩の開基と伝えられている。約二メートル五十センチの石像は

参道の両脇に立っていた。これは今までの仁王とは異なり、忿怒の形相も顕著に表現されており、なかなか立派なものだった。

仁王像はこれらのほかにも、ほとんどの寺の山門に立っていた。だが、国東といえば磨崖仏が一般的には最も有名であろう。国の重要文化財に指定されている熊野の磨崖仏は大日如来が約七メートル、不動明王が八メートルもある巨大なものだ。ほかにも元宮磨崖仏、福真磨崖仏など数多く現存している。

また、庚申塔や野仏が寺の境内や参道ばかりでなく、田畑の脇の小道にも空の星のように沢山あった。だから国東をふらふらと歩きまわるのは、なかなか楽しいことである。心がやわらいでくる。

私は今までに国東には十数回通い、延べ二カ月余り滞在した。飛行機でいき、ブルー・トレインにも乗り、新幹線でも通い、フェリーにも乗った。

東京から車で走ったこともある。初めの数回はいろいろな旅館やホテルにも泊まった。ちようどそんなころ、たまたま人に宿を紹介された。豊後高



両子寺仁王像

田市の中心街、桂川沿いにある中之島旅館。画家の岡本太郎、写真家の石元泰博など、数多くの文人が国東を訪れるとここを宿にしたそうである。

かといって、そんなにかたくるしい雰囲気はまるでない。しかも女将が私と同年代だということもあって、居心地はすこぶる良かった。国東にはこれといった名物はほとんどないが、唯一、知る人ぞ知る旨いものがある。城下鰯^{カレイ}。日出町の特産で、日出城跡の崖下の海中に清水が湧くところがあり、そこに繁殖する藻や小魚を食べて大きくなったカレイをいう。

フグの刺身のようにうすく切り、もみじおろしで食べる。とてもカレイとは思えないほどのコリコリした歯ざわりで、中之島旅館で城下鰯をなんども注文したものだ。

いままで、あちらこちらと日本中を旅をして歩いた。四国の高知、北海道の焼尻島、青森県の下北半島など思い出深い土地は数多くある。が、そのなかでも国東は私にとって最も心が安らぐところである。

(写真家)

法然上人と私

田島 栄

法然上人劇の脚本を書かせていただき、前進座が公演してからもう十年が過ぎた。

だが、上人への敬慕の心は深まるばかりである。実をいうと、私はその数年前には、法然上人のことをろくに知らなかった。親鸞聖人の師ということや熊谷直実が弟子入りした名僧だというぐらゐの知識しか持ちあわせていなかった。

そんな私が上人にはじめて興味を持ったのは、前進座が親鸞聖人の劇をつくった時に、法話や著作の現代語訳の仕事を手伝ったのが縁だった。

『歎異抄』の「たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔

すべからずさふらふ……」

人間がこれほどまでに人間を信じることができるとは……。また、人間にこれほどまでに信じられる人間とは……。衝撃であつた。法然上人という名は、私にとって忘れることのできないものとなった。

だから前進座が法然上人劇の上演を企画したとき、劇界の諸先輩をさしおいて、「これだけはどうしても私に書かせてくれ」と申し出て、二年間この一作だけに集中させてもらった。

それで本腰を入れて勉強をはじめたわけだが、仏教関係の書物というのは難しい。われわれ素人



にとっては、読みなれない言葉だらけの上に、仏教書は難解なものだという先入観念があるものだから、二、三頁も読むと頭が痛くなる。おまけにインテリなんて種族は、物事をすなおに見、やさしく考えることが苦手だという妙な癖がある。ものを斜めに眺めてひねくりまわし、わざわざ複雑に考えないと気に入らないものだから、ますますちんぷんかんぷんのじゅげむじゅげむになってしまふ。いわば、おのれのはからいをなかなか捨てきれないわけである。

私は考え悩んで途方にくれてしまった。そのとき眼を開いてくれたのが『百四十五箇条問答』だった。

「酒を飲むのは罪になるでしょうか？」「本当は飲んではいけないが、この世のならいなので……」などという、民衆との問答集である。

そうだ、法然上人は貴賤男女誰にでもふさわしい教えを開かれた人なのだ。学識の深い人にはそのような、初心者には初心者向けに、それぞれに

いちばん適した言葉で語りかける対機説法の名人なのだ。その教えを難しいとかわかりにくいとか思うのは、第一に自分という人間の認識に、第二に自分の学び方にあやまりがある、と気がついた。それから、宗門の方が書いた絵本や子供向けの物語や布教用のパンフレットなどから読みはじめ、一般向けの解説書、やや専門的なものと、ゆつくりと読み進んで行った。

わからないことは宗門の先生方に伺い、間違っている点は注意していただければよいのだ、と思うと気持が楽になった。

しかし、脚本は机の上だけでは書けない。法然上人の足跡を訪ね歩き、ゆかりの地に立って、昔のことに思いをこらし、当時のお姿や言葉を心の中によみがえらせて、イメージを深めることが必要であった。

そのために、津山の誕生寺には三度、嵯峨の清涼寺の釈迦堂には五回、叡山の黒谷には二回、ほかに劇に出て来る遺跡はすべて訪ねた。

誕生寺近くの田圃の中の道ばたにある「仰叡の灯」とよばれる石燈籠が印象に残った。

父を殺された幼い勢至丸が、母とも別れ、比叡山をめざして旅立った後、母は雨の日も風の日もここを訪れ、遠く叡山の方角をみつめながら、わが子の無事を祈ったと伝えられる所である。「恨みを捨てて、真実の道を求めて生きよ」との父の遺言と母との別れ、幼い日の心の傷と深い悲しみを法然上人は胸にしつかりと刻みつけ、終生忘れることがなかったろう。だからこそ、戦乱と災害の世に呻きのたうち絶望する人びとの苦しみを自分の苦しみと感じ、あの大いなる人間愛の宗教を開いていったのだ。胸が熱くなり、しばらく立ち去れなかった……。私は伝説や民話を大切にする。その中には青史からは得がたい民衆の夢と願いが脈々と生き続けている。

法然上人が二十四歳の時に参籠した嵯峨の釈迦堂では三国伝来の生身の釈尊像を拝んだ。このお像はお釈迦様が母の麻耶夫人（まゐにん）に法を説くために忸（しう）

利天^{りてん}にのぼられた時のお姿であり、東大寺の齋然^{ちようぜん}上人が母にはげまされて宋に渡り、苦難の末にわが国へもたらしたものと聞いた。そして法然上人の母との別れ……。私の心に三人の母の姿が重なって浮んだ。母への思い——女人のしあわせを願う教え……。「そうか、来てよかった……」

叡山の深い谷間にある黒谷では、冬は飲み水も凍る寒さ、雨期には敷物も腐る湿気というきびしい環境の中で、求道の精進の末、ついに弥陀の本願にめぐりあわれた上人の御苦勞が偲ばれて、身のひきしまる思いだった。

ここで出会った老齡の尼僧の言葉が忘れられない。「私はいつも法然さまといっしょにいるからしあわせです。いつでもお話できるから淋しくありません」

百万遍の知恩寺に十日ほど泊めていただき、浄土宗の雰囲気の中で構想を練り、僧侶の方がたと毎夜語りあったこともたいへん意義があった。あの日のこと、賀茂の河原に佇んで思いをこらすと、

昔の情景がよみがえってきた。戦火や災害に家を焼かれ身内を失い、疫病と飢えに、明日への希望を失った人びとがあふれている。法然上人が現われて難民たちに語りかける。

「お聞きなさい。ここからはるか遠い西の方に極楽浄土という美しい国があり、阿弥陀仏というやさしい仏様がおいでなさる。阿弥陀仏は人間を深く愛され、悩みや苦しみをもつ者、不幸な者、愚かな者をあわれみ、私を信じ、私の名を呼ぶ者は、たとえどのような人間であろうともみな守り助けずにはおかないとお誓いなさっています。だから皆さん、阿弥陀様のお言葉を信じて「南無阿弥陀仏」と声に出して頼みなさい。たとえ大地を打つ手ははずれることがあっても、「南無阿弥陀仏」と称えて救われない人間は一人もありません」さらにはげまし続ける。「皆さん、み仏は人間の父であり母なのです。「南無阿弥陀仏」と心からその名に頼り声に出して称えるとき、仏様は必ずあなた方を助けにきて下さる……。私の話がよくわ

からない方もいよう、だが、わからないままでも、疑いながらも、まず念仏を称えてみなされ。きつと苦しみを乗りこえる力がわいてきます」

私が法然上人劇の脚本に費した約二年間のうち、書物を学んだ時間や原稿用紙に文章を書いた時間は合計十ヶ月にもならない。あとの一年何ヶ月かは、遺跡をめぐったり、宗門の先生の教えを受けたり、話合ったり、考えたりして過ごした。

考えるといっても、自分一人でうなっているばかりでは劇はまとまらない。心の中で登場人物と交流するのである。法然上人やまわりの方がたと話合うのである。知恩院の奥の御廟には十回近くお参りしている。

法然上人という方は、こちらが話しかけさえすれば、誰の前にも現われ、なんでも聞いて下さり、答えて下さるような期待を抱かせてくれたのである。

また取材を通じて感じたことは、現地に行き、遺跡に立って、昔を偲びながら話を聞くと、心の

底までしみとおри、イメージもはつきりと浮んでくる。

そういう月日を重ねてゆき、私はますます法然上人が好きになっていった。

日本にも外国にも英雄や偉人は大勢いるが、法然上人ほど人間を愛し、人間のしあわせを願い続けた方は稀有である。この世が続くかぎり、人間社会でもっとも大切なかめは、人間同志互いに愛しあう心だと思う。仏法の真理も、つまるところは「愛」の一事にあって、決して深遠で難解なものではないはずだ。すべての人間に通じる普遍的なものであれば永遠の真理にはなりえない。

ご承知のように、仏法の大慈大悲とは、すべての生命をかぎりなく愛し、その救済を願う心であり。弥陀の本願とは、阿弥陀仏がいつさいの生きとし生けるもののしあわせを願って立てられた誓いであり。

法然上人の念仏の心は、この苦難に満ちた世の中を、あらゆる人間が共に手を携え、愛し合い、

生命を尊び、未来に希望をもって、せいっぱい明るく生きてゆこうという、万民へのはげましであり、呼びかけだと信じる。

しかし、今の日本の現実はどうだろう？ 人間社会のかなめである愛し合い信じ合う心が失われて、みんなが自分本位に走ってばらになり、弱肉強食の争いがくりかえされ、断絶とか、疎外とか、人間不信とか、無気力無関心無感動とか、汚職、暴力、非行がはびこり、伝染病のように流行する。

表面上の物質的な繁栄とは裏はらに、精神の荒廃は眼を覆うばかりで、まさしく末法濁乱のきわみともいえる状況にある。

数年前のことだが、フランスの有力新聞ル・モンドが『日本文化——ゼロの年月』と題して七ペーじもの特集を発表した。「日本は経済大国になった半面、文化的にはコマース・イデオロギ―に支配される小国に転落した」と批判し、初めの部分では「日本は、この十年たらずの間に千年

の文化的伝統を捨て去ってしまった。大部分の日本人は根なし草になり、科学技術が作り出した新しい神々に身をゆだねたり、西洋から輸入されたヒーローをあがめている。文学よりも漫画を好み、すぐれた民族的映画よりもテレビの紋切り型番組を好む……」といった論調で、日本の精神・文化の墮落を実例をあげて正確に分析している。

また「警察白書」によれば、昨年の刑法犯は前年よりも六万七千件も増えて、二百二十八万四千四百一件という戦後最高を記録し、中でも少年犯罪は凶悪粗暴化の一途をたどり、全刑法犯の五十パーセントを占めている。

法然上人は、生命を尊び、差別を廃し、暴力を否定し、人間が人間らしく生きる道を、さし示した方である。私たちの祖先は経文は読めず理論はわからなくても、み仏の心を子々孫々に伝えてきた。

しかし私たちは、こういう日本のよいものを後進や子供たちにしっかりと伝えていだろうか？ 怠けたむくいが今の世の中に現われているのかも

知れない。

とにかく、こんな荒れはてた世相をつくってしまったのは、私たちの罪であり責任だ。そのことをまずはっきりと認識し反省して、世代をこえて人間同志が心を通わせる環境、ふれあいの機会と場所を積極的につくり出す努力をしなければならぬような気がする。

「法然上人伝」を読むと、当時の吉水の庵室では、訪れた檀信徒の人びとに法話をなさるだけではなく、一人一人の現実生活の中での苦しみや悩みまで語り合い、助言を与えている。それは『百四十五箇条問答』や遊女や盗賊との話に示されているし、親鸞聖人は恋愛の問題までも法然上人に打ちあけて相談したと伝えられている。

門弟や檀信徒たちと、生きてゆくすべをいっしょになって考えていく中で、愛が育ち絆が結ばれ、「この人のいうことなら……」という信頼が、念仏を潮うしほのように拡げていく力になったのではないだろうか。それが、本当の意味での生活に密着し

た生きた仏教だと思ふのだが……。実践できるかどうかは、布教者が本当に人間を愛しているかどうかにかかわっているのではないだろうか？

現代の人間の多数は、未来が見えないのではないだろうか。今日の世界が、日本が、自分の生活がこれからどうなっているのか、まったくわからない。何を心の支えにして生きてゆけばよいかわからないことも、誰も示してはくれない。だから、いつも心のどこかにいいような不安がつきまとって、落着いていられないようである。私にもよくはわからない。しかし、過去の歴史をしっかりと学び、すぐれた先人の生き方をみつめてゆけば、未来への道は開けてくると信じている。

私はこの頃よく考える。法然上人が今いらっしやったら、何を思い、私たちにどうおっしゃるだろうか……。上人は比類のない先見性と現実への深い洞察力を兼ね備えた方である。

法然上人がいかに人間を愛し、人間平等の立場を貫いたかを示す逸話の一つに、遊女救済がある

が、いやしい稼業を恥じる遊女に対して、「あえて卑下することなかれ」といい切っている。実にすごい言葉だ。この時代の女性はすべて罪深い身と差別されていた。まして遊女などは汚れきったけがらわしいものと侮蔑されていた。それを「み仏はあなたのような人のために本願の念仏を示された。女性は本願の正機、念仏を称えれば必ず浄土へ往ける」と、いっさいの差別を否定しきったのである。

日本のあらゆる歴史書は、女性解放の歴史を明治時代から書き初めているし、人間平等の思想は維新後に西洋から入ってきて、文明開化の中で芽ばえたように記している。だが、実は日本で最初に人間平等、女性解放を称えたのは、今から八百六十年前に生まれた法然上人である。

また、白河の禪房を熊谷直実が訪れて、戦場でこのとき熊谷の心を苦しめていたのはそれだけではないと思う。

今日、前の大戦で父や子や兄弟を失われた遺族の方が大勢いらっしやる。その方がたは今もなお失った身内のことを思い、浄土への往生と安息を願っていられる。

だから、修羅の巷をくぐってきた熊谷の胸には、戦場で倒れた友の魂、また恨みをのんで死んだ敵の霊は、いったいどこをさまよっているのだろうか……、敵味方幾万の霊を救う法があるのだろうか……。という思いでいっぱいだったろうと推察する。

この問いに対して、幼い頃に父を殺され、母と悲しい別れをした法然上人がなんとお答えしただろうか？

知恩院の御廟の前で、私はずいぶん考えた。

人間同志が憎み合い殺し合う戦争のない、平和な世の中を招来しよう。そのために、人間すべてのしあわせへの祈りがこめられた本願の念仏を、この世のすみずみまで広めよう。それが法然上人の生涯の願いではなかったのでは……。 (劇作家)

90年代の企業トレンドは

スポーツライバル笑顔の多い会社です。

サンスポーツ21は、新しい時代のライフスタイルをとらえた総合スポーツクラブ。新日鉄グループ、スポーツ事業の中核としてたまたま拡大・躍進中。

サンスポーツ21・柏

JR常磐線柏駅下車

サンスポーツ21・瑞江

都営新宿線瑞江駅下車

サンスポーツ21・水戸

JR常磐線水戸駅下車

サンスポーツ21・磯子

JR京浜東北線磯子駅下車

サンスポーツ21・大日

地下鉄谷町線大日駅下車

サンスポーツ21・御影

阪神電鉄阪神御影駅下車

(法人会員は東日本、西日本別に共通利用ができます)

スライディング・スクーター・バタフライ・エアロビクス・アスレチック・ゴルフ
いつでも自由に楽しめる5種目です。



URBAN COMMUNITY

Sun Sports 21

日鐵サンスポーツ株式会社

代表取締役社長 高木 勲

(本社) 〒105 東京都港区海岸2-1-7 TEL.03-3798-2726(代)

好評発売中

法然全集

全三卷

大橋俊雄

万人を救済すべく日本思想史上に一大転機をもたらした稀有の仏教者「法然の全て」鎌倉新仏教の花開くとき、日本浄土教の原点をなし、日本思想のありかに新たな道を切り拓いた法然。本全集はその全容を提示すべく、法然研究の第一人者の訳業を得て贈る、初の本格的現代語訳全集である。

◇内容

〈第一巻〉往生要集釈 三部経大意 三部経釈 補注 〈第二巻〉逆修説法 選択本願念仏集 補注 〈第三巻〉消息篇 問答篇 制誡・起請等篇 補注

●体裁 菊判上製箱入 平均350頁 各巻5800円 ▼内容案内呈

■大橋俊雄 2000円
法然入門

一遍上人全集

全一卷

橘 俊道
梅谷繁樹

仏教的なるものと日本的なるものとの出会い！
釈尊その人の生涯をほうふつとさせる一遍は同時に
日本の精神を考察するとき、欠かせぬ存在である。
その全貌を提示する画期的な現代語訳一卷全集。
〈内容〉一遍聖絵（付）絵詞伝・播州法語集・法語補遺・
法語番号対照表・遊行回国図・略年譜・研究文献他

●体裁 菊判上製箱入 6000円 ▼内容案内呈

良寛

●吉本隆明

現代に生きる原点を指し示す良寛の新しい全体像

自分の欲望を自然の中に溶かすようにして生きた良寛の隠遁生活。
そこからこぼれ落ちるようにして生れた詩や書の作品。この良寛の
先駆的生き方に今初めて言葉が届いたと絶賛の話題作。 2000円

▶ 定価は消費税込み

春秋社 | 01東京都千代田区外神田2-18-6 ☎(03)3255-9611 振替東京8-24861



こ

の

人

。

チターに生きる内藤敏子

写真と文 小川喜一郎

灰色の空をバックに大きな観覧車が無気味に回る——と、そこに流れる主題歌「第三の男」のメロディ。アントン・カラスの演奏するチターの調べがそれであった。

ゲルマンの楽器

敗戦の傷がまだ癒えきっていなかった昭和二十七年の日本で、同じように連合軍四か国によって管理されていたウィーンを舞台にした英国映画「第三の男」が封切られた。ジョセフ・コットン、オーソン・ウェルズ、アリダ・ヴァリ主演によるサスペンス・スリラーの映画だったが、名匠キャロル・リードの演出もさることながら、モノトーンの画面に漂う哀愁に満ちた雰囲気は何にもまして盛り上げたのは、私達がまだ一度も耳にしたことのない楽器チターの奏でる主題曲で、その奏者アントン・カラスの名も一躍世間の脚光を浴



び、以後、ハリー・ライムのテーマ曲「第三の男」は不朽の名曲として人々の間に語り継がれることになったのである。

武蔵野音楽大学を卒業した内藤敏子さんはスイスに留学し、もっぱら新進のバイオリニストとして将来を囑望されていたが、きびしいバイオリンのレッスンに耐えながら、ある時、協演したチターの音色にひかれ、チター界の權威、J・コーザ女史の門を叩いてその教えを受けるようにもなっていた。チターは日本でこそあまり目に触れ、耳にしたことのない楽器だが、遠く旧約聖書にも登場する古楽器の一つで、近くは一八二八年六月にワイマールの町でゲーテがチターの独奏やフリユートとの二重奏を楽しんだ記録もあるという。主にオーストリアやバイエルン地方に盛んで、現在のような洋梨型のチターになったのは十八世紀末以降のことだが、メロディー絃が二本に伴奏絃が十二本並ぶチターは手軽に持ち運びができ、かつ、独奏から合奏まで楽しめるといのでヨーロッパでの人気も非常に高く、チェンバロに似た響きがルネッサンス音楽や古典曲にも欠かせぬ楽器の一つとなっている。内藤敏子さんが新進バイオリニストとしてヨーロッパ各地で声価をあげる一方で、その同じ東洋の女性が新進チター奏者として人々の注目を浴びるのにさほどの時間はかからなかった。さらに、チターとの不思議な出会いについて彼女はこうも語ってくれたのである。

——ゲルマン民族の楽器だったということから、ドイツ人の間では大変に人気があります。

第一次世界大戦で敗れ、青島（チンタオ）で捕虜になったドイツ兵が日本にも送られ、いくつかの収容所に預けられるのですが、おそらく、その時、彼らの何人かがチターを持ちこんできたのが日本で最初ということになるのでしょう。当時の日本人はずいぶん珍しかったらしいですね。で、東京では築地の本願寺が仮の収容所になるのですが、その収容所の所長が私のところの、嫁いで来た伯母の祖父だったそうです。おそらく、所長のはからいでチターの演奏などが大目に見られていたらしいのは、あの頃の捕虜生活の写真を見てもよく分かります。それから、本願寺が手狭になったので移転先が今の千葉県習志野と決まりますが、そこは私の曾祖父の、篠原国幹がかつて明治天皇から下賜された土地でもありました。――

篠原国幹といえは明治十年の西南戦争で西郷隆盛の部下として官軍と戦い、後に許されて近衛師団長まで務めた薩摩や陸軍を代表する猛将だったが、習志野原の名も「篠原に習え」という明治帝のお言葉によって名づけられたものだと聞く。新収容所に移ったドイツ兵達がそこでもチターの演奏を楽しんだことは想像にかたくないし、反対に、そのチターの日本の名奏者に、その在所の曾孫がなろうとは当時の誰も夢にも思わなかったに違いないのである。

チターに生きよう

偶然とはいえない話はまだ続く。ちやうど今から二十年ほど前の一九七四年夏、彼女は

留学先のスイスでの生活を終え、モスクワ経由でナホトカから帰国の船に乗っていたが台風に遭い、船が大揺れした瞬間に三階のデッキから足を踏み外して甲板に叩きつけられ、全身打撲の重傷を負ってしまった。左半身不随の、バイオリニストとしてはまさに致命傷ともいっていい大打撃である。当然ながら左腕でねじって持つバイオリンの演奏は、まず不可能といていい。以来、帰国後の寝たきり生活が六年余も続く。

——バイオリンでの音楽活動は断念しなければならぬと覚悟しました。考えてみれば幼い頃からの勉強は一体、何だったのだろうと考えると、正直な話、寝ても寝られない毎日が続きました。そんな苦しみのある日、ふと、傍らのギターが目にはいったのです——。

試みに壁に寄りながらギターを爪弾いてみた。不自由な左は、親指に爪を一つはめてメロディー絃を押さえる。右指は伴奏絃の上を走らせるのだが、音は自在に空間を駆け巡る。最初は、いつか来るだろう再起の日への指ならしのつもりでいた。が、その美しい音色は周囲の人々を捉えて離さなかった。

「すばらしい音ですね。耳にもごく自然になじんでくるし、聴いていると心がやさしくなってくるみたいです。」

そんな感嘆の声を耳にするうちに、内藤敏子さんの心に、いつか、このギターに自分自身を賭けてみようか、という気持がむくむくとわきあがってきた。考えてみれば、すでに東ヨーロッパの国々では、国立音楽大学に日本での邦楽科のようなギター科を置いている

ところも少なくはないし、現に五十人を越すチターの合奏会が開かれたり、十九世紀末には各地にチター協会も生まれている。自身の楽才を賭けるのに不足はない世界なのである。やがて、健康をとり戻した彼女は、身近な人々にチターを教え始め、十年前に語らって日本チター協会を設立した。自ら会長に就任した協会員はすでに四百五十人を越えるという。秋篠宮妃の紀子さんも彼女のお弟子の一人である。ご実家の川嶋家もウィーンに二年ほど滞在の時期があつたが、その頃、チターの魅力にひかれた母堂が内藤敏子さんに教えるを乞うたのが縁で、その頃、幼かった紀子さんも一緒だった。今でも、内藤さんは月に何回か赤坂にある秋篠宮御所への出稽古を欠かさない。

——紀子様という方には、ご自分の欲がありません。いつも、何か私にできることはないか、人様のお役に立てるものはないかをお考えになっている女性です。お怒りになったのを見たこともありません。お怒りになる前にご自分の反省がいつも先に立ってしまうのです。そういうお心は、音楽についてもいえることで、チターのご練習でもきわめて素直でいらつしやいます——。

なるほど、それは同時に、教える立場の内藤敏子さんにもいえそうな言葉で、彼女にはほとんど気負いが無い。一年に百二十日もコンサートやら地方の講演や演奏旅行に費やすという超多忙な日常からはおよそ想像もできない、静かな口調とおだやかなものの腰のチター奏者である。人づてではあるが、芸術や文化は思いやりのあるやさしさが土台であり、

文化こそ人間の生涯のエネルギー源であると説いているそうであるが、もはや彼女は一個の演奏家であるというより、人生における教育者であるといったほうがいいのかもしれない。

いつか大輪の花

かつて中野千代、林竜作、篠崎弘嗣氏にバイオリンを師事し、弱冠十七歳にして来日中のソ連バイオリニスト、E・ベスロードニー氏に認められモスクワへの留学を勧められた内藤敏子さんが、不慮の災難から再起して日本で一流のチター奏者へ転身した。あの、ナホトカからの転落事故が彼女の生涯の選択を分ける原因にはなったのだけれど、彼女はそれを目に見えない不思議な力だったのかもしれないと達観し、述懐する。闘病生活中に三度も死線をさまよった体験からか、入院中の患者達に対する関心も深く、乞われて大学病院のホスピス病棟などで慰問演奏会を開いたりするが、リクエストに答えて弾く「さらばふるさと」の歌がいつか合唱に変わり、会場全体が忍び泣きに変わることもしばしばあるという。

——でも、そんなふうにして泣いた涙から勇気や希望や、新しい生へのエネルギーがわき起こってくれたら、私は本望です。チターを演奏していてよかったな、と思えるのもそうした瞬間です。——

事実、内藤さんのチター演奏に触れて、人生観が変わったという人の数はたくさんある。

「最初に聞かせてくださったのは『山への別れ』という一曲でした。私は先生の奏でる指の動きを見つめながら、ふとこの世のものでないような幻想を覚えました。『夢のよう』と申しますが、まさにそんな思いでありました。曲が静かに終わった時、私は『我に返った』ように思いました。私には、音楽というものがほとんど分かりませんが、そんな私を夢見心地にしてくれたチターの演奏に大きな感謝を感じています。」

また、ある人は、

「十年前、内藤先生のチター演奏にめぐりあってから、私の人生観は百八十度変わりました。やわらかく、暖いチターの音色が胸の中に流れこんでくると、しだいに心がおだやかになって、元気になってきます。すると、不思議に自分のまわりのマイナス面より、プラス面が見えてきて、厚い壁が風にゆれるカーテンのように感じられます。」

そう感想を述べてきた。内藤さん自身も、——チターは特殊なものでもなく、特にむずかしい奏法をもつものでもなく、手軽に持ち運びができ、一人でも大勢でも楽しめるということは、私達の人生にたくさんの喜びを与えてくれるに違いありません。この美しい音色が多くの人々の心の中で生き続けていくすばらしさに、心から感謝いたします。——と語っているが、ピアノと同じ音域を持つこのチターが、やがて多くの愛好家を生み、チター奏者内藤敏子の蒔いた一粒の種が、いつか日本中で大輪の花を咲かせる日もそう遠くはあるまいと思うのである。

「本」の散歩道

書評＝齋藤晃道



『清貧の思想』

中野孝次著

雑誌の裏表紙のセピア色の広告写真が眼にとまった。カラーが当然の時代だから、モノクロがひときわ目立ったのだ。天井から吊り下がった裸電球のわびしい光で、丸い小さな「ちゃぶ台」が照らし出されている。なぜか人がいない。死にそうにお腹の空いた家族がそろって貧しい夕食を囲んだ戦後の

懐かしい光景。「振りかえってみるとあの貧しかったころが美しく見える」という文が、無性に胸を打った。

貧しさと美しさ。「衣食足りて礼節を知る」の言のように、物質的な豊かさと精神的な豊かさは比例しそうなものだが、限度を知らない暖衣飽食は、ある有名な僧が「物で栄えて心でほろぶ」と明言したように、反比例するようだ。これが日本の現実かも知れない。

日本人が感じるのだから、外国人にはもっと輪をかけて眼に映るのは当然。生産第一主義の輸出大国として貿易黒字を誇る日本。自国の利益しか考えないエコノミックス・アニマルと見られ、いまや日本人はビジネスマンも旅行者も金の話しかしない嫌われものになりつつある。資源や環境を考えても、地

球上の共存のためには、所有欲の限定をし、無所有の自由を見直そうという思潮の外国で、日本人とは何者かという悪い関心が高まる。

外国で話を求められる機会の多い著者は、日本にはかつて「清貧」という美しい思想があったことを語り、古典を引きながら西行、兼好、光悦、芭蕉、池大雅、良寛など、現世の生活を簡素にして清貧に生き、風雅の心を楽しみ、人間として高尚な生き方をする伝統文化があつたと話してきた。本書はこの「清貧の思想」を集成し著述したものである。

エコロジーとかシンプルライフとか盛んに言われたした当今、新しいあるべき文明社会の原理は、日本人の先祖が作りあげた「清貧の思想」から生まれるだろうと筆者は予言する。本書は、繁栄を享

受する日本人に「人間どう生きるべきか」を厳しく問いかけている。

（草思社・二二〇ページ・一五〇

〇円）

『女ざかり』

丸谷才一著

新聞社の実態を描きたいという筆者の長年の構想を書き下ろした長編、大新聞の女性論説委員の筆禍事件をめぐる社会小説である。

新聞の読み方は興味によって各人各様。しかしあの堅い社説を読むという人は一般に少ない。この社説や連載コラムの執筆を担当しているのが論説委員という人たちである。

主人公の南弓子は四十五歳の「新日報」の記者。家庭部デスクから論説委員に抜擢された。弓子は二十代で結婚、娘を出産後、離婚。かつての夫は北海道の銀行の頭取

に出世したが、自分は独身を通して。 「女ざかり」の彼女には男友達が十一人もいるが、本命は仙台の大学の教授の豊崎洋吉、妻帯者で哲学者。五十五歳の初老の恋人は毎週上京し東京の大学で教鞭をとる。これが二人の逢う瀬、弓子は論説委員から一人の女にもどる。

弓子と同時に論説委員に抜擢された社会部の浦野は辣腕だが、文章がまるでだめ。弓子は着任当日から社説を担当することになった浦野の原稿に手直しをしてやるハメになる。論説は新聞社の顔とも言える重要な役どころだが、社説や連載コラムがどのような手順で出来上がってゆくのか舞台裏はあまり知られていない。筆者の構想の着眼もここにあり、綿密な取材によって得た資料によって、論説

委員の日常の生態が克明に描かれてゆく。

ある日、論説委員の欠席が多いために担当がまわってきた弓子は、水子供養で儲けている某宗教団体の、水子供養塔の除幕式に出席した元首相が妊娠中絶を批判した記事を取りあげ、この発言が男性中心主義だと批判する論説を書いた。女としての本音が出た。偶然が重なり、チェックを抜けた原稿はそのまま活字になる。社説が教祖を立腹させ、政府与党に問題視され立場が危うくなる。事件は浦野や豊崎を巻き込みながら展開していく。

論説委員が書く文章の上手、下手まで題材にしているのが面白いが、名文家として知られる著者の文章にのせられて、一気に読まされた。（文芸春秋社・四三六ページ・一七〇〇円）

今こそ浄土教

松濤弘道

今、私の手許にジョン・ビーティ著の『浄土』という写真集があり、その冒頭に「自然の讃歌」という副題がついています。この百ページあまりの本は千九百八十八年に英国ロ

ンドンのチームス・ハドソン社から出版されたもので、別に浄土教に関係ある宗教書ではありませんが、世界各地の自然の美を写した八十枚のカラー写真から成り、山岳登山家で

あり、探検家であり、写真家でもある著者が、その写真を通して世界各地に残る美しい自然を紹介し、その自然と人間の調和を訴えたものです。

今日の世界を見渡しますと、公害による環境汚染や人口増加による飢餓や資源の枯渇、貧富の差の拡大やイデオロギーや民族間の対立による犯罪、紛争の多発、家族の崩壊から生き甲斐感の喪失など、いずれをとってみても人類の自滅につながる危機に直面し、これらの難問題を解決する方策が国家や宗教団体や教育機関や個人に求められています。そこで、浄土教に対しても、これらの問題にいかなる指針や解決策を提示できるのかが問われています。もしそこに何ら建設的なものがないならば取り上げる必要もなく自然淘汰され

るにまかせておけばよく、もしあるならば、あらゆる機会をとらえて広く内外に向かってその考えを伝えるべきでしょう。そこで、まず浄土教の持つ自然観と人間観と人生観の第一を現代の思潮に照らし合わせて概略、吟味してみたいと思います。

第一の自然観については、最近までの世界の動静は、欧米を中心とする帝国主義とキリスト教の影響を受けて、自然と人間との関係を調和させるという考え方はありませんでした。ところが今日のように科学技術が進歩し人口が増加して、公害などの環境汚染や資源の枯渇が深刻化するにつれて、今まで無制限に拡大再生産を続けてきた人間中心主義の生き方が反省を迫られるようになりました。ここに至って西洋の識者の間からも自然は人間

を包むものと考え、その自然と人間がいかに調和し、共存共栄をはかるかを問題視するようになりました。仏教で説く「草木国土悉皆成仏」という、すべてのものに仏性があり、自然を大切に育てていくべきだ、という思想が見直されてきたのです。

地球上における私たち人間の存在をよくよく考えてみれば、獅子身中の虫のようなもので、それはちょうど私たちの身体を蝕むガン細胞に似ています。それは身体に寄生し、身体を栄養源として生きています。そこでもし、ガン細胞が必要以上に繁殖すれば身体そのものを破滅させ死に至らしめます。そうしたならば身体からの栄養の補給を得られずガン細胞そのものも死滅します。したがってガン細胞は身体を死なせない程度にしか生きられま

せん。私たちはこのガン細胞のように、自然という身体を媒体として生き、そこからの資源なしには一日たりとも生きることができません。にもかかわらず、私たちはその自然に対して感謝するどころか平気で踏みじり、台無しにしていながら我が物顔に振る舞っているのが現状です。これではいつかは自然からシツペ返しを食らうのは当然のことでしょう。

かつて米国の文化人類学者フロレンス・クラックホーン博士は人類の歴史に三段階ありとし、その自然に対する態度にも（一）人類の自然への屈伏、（二）人類の自然への随順、（三）人類の自然を征服、の三様態があり、文明が進むにつれて（一、二、三）の段階で発展してきている、と述べています。たしかに過去から現在までの人類の歴史を振り

返って見るとクラックホーンの所説にうなずけるものがありますが、しかしそのまま(三)の状態では今後進んでいつていいものかどうか、問題が残ります。このクラックホーンの所説に対して、浄土教は近代社会の「人類が自然を征服」することの限界を見極め「人類と自然の調和」を主張することができましょう。

今日の経済発展のためには工業化や情報産業化が不可欠ですが、あえて地球上の資源を枯渇させず、冒頭に述べたように人類は地球の獅子身中の虫としての謙虚な態度をとり、代替資源の開発や自然と共存共栄をはかることが必要ではないでしょうか。従来の科学・技術の発展は人間本位の快適さや快楽を追求し、そのためには自然を征服し屈伏させることを当然視してきました。それはある程度可能だ

としても、いくら人知が発達しても人間には自然の造物を自由に生んだり作りかえることはできません。それをあえて強行しようとするればかならず自然からの反動やシッペ返しを食らいます。ノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツ博士はその著『人類の八つの大罪』で現代人の犯した罪として、人口過剰、生活空間の荒廃、人間同士の戦争、感性の衰退、遺伝的な頹廢、伝統の破壊、洗脳されやすさ、核兵器をあげ、これらを放置してゆくと、人類は早晚自滅すると警告しています。私たちはいち早くこうした危機を察知し、そうならないためには今までの人間のあくなき欲望による拡大生産や消費、利潤追求の姿勢にブレーキをかけ、人間中心主義より宇宙中心主義に立脚した少欲知足の精神で、自然と調和し

共存共栄をはかつていかなければならないと思います。

第二の人間観については、浄土教は決して超越的神の啓示による唯一絶対の原理主義的宗教ではないということです。私たちにはそれぞれ生まれ育った環境や性格によって、考え方や生き方が異なり、救われ方も異なるのが当然で、自分に適した教えを選択する自由が与えられなければならないでしょう。法然上人は知恵第一の人といわれ、多くの教えに通暁し、定められた戒律を守ろうと努力しながらも、「かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん、ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつわものにあらず。この三学の外にわが心に相應する法門ありや。わが身にたへる修行やある」と悩み抜き、そ

の結果、選択本願念仏の一行を選択したのです。すなわち自分の機根に合った宗教を選んで、決してそれを他に強制しないという生き方をされたのです。いくら高邁な教えであつても自分の機根に合わなければ何にもならないとし、この考え方は江戸時代の石田梅岩などに受け継がれ、「各人みな心をもっているのだからその心を磨くのが大事である。その手段としては、心を高める宗教ならば、神道だろうが、仏教だろうが、儒教だろうがどれでもいいのだ」と説いています。この相対的な考え方は今日の日本人の多くが持つ重層的な宗教心を育てる基となってきました。今までの欧米人を中心とする人間観は、神との契約によってそれから付与された個性を最大限に伸長するという個人主義が発達しましたが、

神と個人が直結するあまり、人間対人間の倫理の原理が生まれてこなかったくらいがあります。その代表的な考え方が十七世紀の英国の哲学者ホップスの唱えた「万人に対する万人の闘争」という近代思想です。そこでは個人の主体性や権利というタテの線だけが強調されて、周囲の環境や人間による直接的、間接的原因によって制約され、包まれる一部だというヨコの線が弱められる傾向があります。神の愛がすなわち隣人愛であるという考え方があっても、それはあくまでも断絶した個人が神の名の下における愛であり、連続した人間同士のおもいやりではないようです。これに対して浄土教では「衆生相憐れむ」とか「一人一切人、一切人一人」という考え方に裏打ちされて、同事同情の世界を展開させます。

すなわち、そこでは特定の神や宗教を持ち出さなくても、同じ欠点だらけの人間同士の連帯感を強調しています。今日の世界を見渡しますと、各地でイデオロギーや宗教の対立や民族間の紛争が頻発していますが、その原因には自分たちの持つ主義主張を絶対視し、他の存在を認めない排他的な原理主義に立脚しているからではないでしょうか。こうしたところからは世界の平和は到底望めなく、私たちはそうした「わが仏のみ尊し」とする絶対的原理主義から脱脚しなければならぬと思います。

第三の人生観については、私たちはこの世に一度だけしか生きられない、そしてたった一人しかいない貴重な存在なのですから、それを有意義な悔いのないものにしなければ、

生きてゐる甲斐がないでしょう。そのためには自分の持ち味を活かし、世間によい影響を与えられるような自分にならなくてはなりません。外国ではあまり「勤勉」とか「努力する」という言葉を聞きませんが、私たちは力まなくてもよいから、また認められなくてもよいから、すべてのものを活かし働く喜びを持つべきでしょう。従来の仏教では私たちがみな出家して宗教的な戒律を守り、仏教的な修行をしなければ解脱や救済に預かれないとされていましたが、法然上人によってそうした難行道は否定され、だれもが信心し、念仏することによって救済されるという易行道が開かれました。法然上人は「現世のすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし」と述べていますが、これは念仏することによって自

分を含めてすべてのものが活き、喜び合える如法の共生的人生を送ることをすすめていきます。すなわち、自然のため、ひとのため、自分のために一所懸命に働くことによって「衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じたまふ」で、仏も喜んで下さるということです。この教えは江戸時代になって鈴木正三などに受け継がれ、「夫農人と生を受事は天より授給る世界養育の役人なり。去ば此身を一筋に天道に任奉り、かりにも身の為を思わずして、正天道の奉公に農業をなし、五穀を作出して仏陀神明の祭、万民の命をたすけ、虫類等に到迄施べしと大誓願をなして、一鍬一鍬に、南無阿弥陀仏、なむあみだ仏と唱へ、一鎌一鎌に住して、他念なく農業をなさ人には、田畑も清浄の地となり、五穀も清浄食と成て、食する人、煩惱

を消滅するの業なるべし」とし「何の事業もみな仏行なり」というコペルニクスの展開を遂げたのでした。この境地を椎尾弁匡博士は「こころ生き、身いき、事いき、物も生き、人みな生きる」といきの里」と詠んでいます。

以上の、浄土教の持つ宇宙中心的世界観、集合的人間観、共生的人生観は、ますます混乱の度を深める世界の人々に、環境との調和、対立の回避、生き甲斐をもたらし規範になるのではないでしうか。これら浄土教の主張は従来の人間中心的世界観や個人的人間観や消費的人生観に終止符を打ち、それを超克する未来に開かれた誰でも的人生教といえましょう。伝統的には宇宙中心的世界観を永遠のいのちそのものである「阿弥陀仏に帰命する」と表現し、集合的人間観をはたらき場であ

る「浄土に往生する」と表現し、共生的人生観を「念仏する」と表現してきました。しながら、今日のわが国には、世界的危機を直視してその解決策である浄土教を身をもつて実践し、納得のいく形で内外に訴えていく人材や書物が払底していることです。これでは折角先達たちの心血をそそいで伝えてきた浄土教も「宝の持ち腐れ」になってしまいました。そうならないためにも、私たちは冒頭のビーティ著の『浄土』で引用している英国の女流詩人クリスチナ・ロゼッティの以下の歌の精神を地道に体现すべきではないでしうか。「この聖なる地を注意深く歩もう。よく見れば、私たちの立つこの場が極楽なのだから」。

（上野学園短大教授・栃木近龍寺住職）

山陽新幹線ひかり号は、ウナギの名所である浜松を通っている。車内でウナギ弁当を買うなら名古屋を過ぎてからにしたほうが良いよ、としたり顔で忠告してくれる人がいた。さもありなむ、と当方も空腹を我慢



してビュッフエで注文したら目の前でとり出したのがパックの蒲焼き。そう、つまり外国へ輸出したりスーパーで売っていたりする例のアレである。で、それを電子レンジでチンをし、弁

当箱にご飯を詰めその上へタレをかけて蒲焼きを乗せ、香の物の小箱を添えて「はい、お待ちどおし」にはすっかり恐れいった。以来、どうしてもウナギ弁当が食べたい時は大丸入口の正面にある弁当屋のを買って乗込むようにしている。まことに百聞は一見にしかずとはよく言ったもので、ことに味の取材をしていると実にいろいろな体験をするものである。近頃ではめっきり評判になり、暮の歳暮用品でもベストテン入りした壮麗な木箱詰めのウドン。たかがウドンなのに、一か月待つのが常識というそれは東北本線の豪雪駅からタクシーで一時間。よくまあこんな雪道を車が走るもんだ、と感心するような場所にあった。店といったってダダッ広い農家という感じの元祖。さて、麺のうまいのは粉と水が上質であり、

その上にプラス・アルファが加わったのにとくらい誰でも知っている。ところがこの辺りの男衆はほとんど四季を問わず出稼ぎに出ているという噂を聞いていたので、肝心の小麦粉はいつ頃、どの辺りで、と聞いたところの家元、まったく落ちつきはらった表情で「ええ、カナダですよ。あそここの粉はいいですよ」とおっしゃったのには仰天した。まさか粉は地ゴナで、と嘘も書けないから、もっぱらこのウドンの良さは同じ地元産の清酒同様、清冽な雪どけ水でこねるからだと書いてごまかした。蛇足だが、同じ乾ウドンでもこののなら絶対おすすめというのなら、東武線「館林」駅前の花山うどん。群馬県「栗橋」駅そばにある土田製麺の「つむぎうどん」。それと、北陸は氷見駅に近い「氷見うどん」を挙げておこう。

法然上人鑽仰会新会員のお誘い

本年四月より浄土宗浄業会と合併して、新しい鑽仰会として誕生しました。今までの会員、浄土誌購読者の方々は、そのまま継続されますが、左記の通り新事務所及び、会則などの変更がありますので、あらためて新会員の募集についてお誘い申し上げます。

事務所 東京都港区芝公園四―七―四 明

照会館内 法然上人鑽仰会

目的 法然上人の立教開宗の精神に主脚

し、時機相応の念仏信仰を幅広く強力に推進するものである。

事業 ①法然上人顕彰の行事と事業。②

時代に即応する教学教化の研究と念仏業の実践。③在家伝道者の養成教育。④雑誌『浄土』及び刊行物の発行。⑤会員の資質向上のための研鑽活動と親睦、情報交換。

⑥その他。

会員 本会趣旨に賛同すれば、誰でも入

役員 会できるが、一応理事二名以上の推薦を必要とする。

顧問、会長、副会長、理事長、常任理事、事務局長等によって構成される。

会議 総会、理事会、役員会、顧問会と

し、①総会は、定時総会は年一回、臨時総会は必要に応じて随時開催。②理事会、役員会、顧問会は会長が必要に応じて招集する。

会計 会の経費は、年会費、寄付金、刊

行物の売上げ金などによって支弁する。年会費は、四種類に分け、会費額は総会で決定する。

イ、特別会費 ロ、維持会費

ハ、一般会費 ニ、購読会費（雑誌『浄土』を購読する方のみを指し、月刊誌を送付）

会員の特典 雑誌『浄土』や本会のトラフ
トの配付、諸行事への参加ができる。以上

●「浄土」誌の別冊か臨時増刊号を編

集してほしいという依頼があつて集まったグループが、実際に始動したのはことしの一月以降のことである。長い間、ファッションを中心に据えた女性月刊誌にかかずらつていた私にとって、すべてが戸惑うばかりの経験続きで、ことにスタッフの誰もが公務や寺務の時間をさいて集まるので、雑誌編集に不可欠の会議も思うように開けず、正直な話、途中で何度投げだしたいと思つたかもしれないのである。それでも、一部の作家や評論家には旧縁を頼つて原稿をお願いしたりしたが、いずれも快諾を得た上での寄稿であつたのは何よりも感謝しなければならぬことだと思ふ。

●私が一番最初に打ち出したかつた編集方針は、意外性の尊重である。宗教色も極端に排除したかつたし、浄土だから「浄土」誌というのではあまりにも芸が無さすぎる。しかし、どうやらそれには限界があつて、せいぜい私の意志が具現されたのは、浄土を象徴するの日に日想観で説かれるところの落日の情景を表紙にとりいれたことくらい

に過ぎないのかもしれない。

●前半に並べた随想には、「浄土」を中広く捉えた上で、「わたしにとって純粹(Pure:ピュア)なもの」あるいは「人間の純粹さに関してならなんでも」結構ですから、という大テーマを提示した上での執筆依頼をしたのだが、そうした意志が充分に伝わらなかつた憾みも残る。私を含めた、編集員の力量不足と反省しなければならぬ。

●まだ幼なかつた昔、今よりずっと肉厚だつた「浄土」誌を覗いて見た記憶がある。佐藤春夫や吉田絃二郎といった当時の有力な文人の名も載つていて、一般月刊誌なみに読者も集め、駅売りまでされていたなどという話を聞かされる、さすがに編集者としての情熱が燃えないわけはないのだけれど、しかし一握りのグループの力だけで往昔の「浄土」誌への再生などできるはずのものでもない。今月号を一つの叩き台にして、鑽仰会の内外から伝統ある「浄土」誌再誕への論議が活発になつてくれれば、それはそれで私のグループの仕事にも充分意義が見出せようと

いうものである。

●およそ雑誌編集など出来そうもない数々の条件の中で、終始、真剣な助力を惜しまなかつた浄土宗東京教区長の大室了暗師に深甚なる謝意を表すると共に、最後になつたがスタッフの名を列記してその労を多とする次第である。

(編集チーフ・小川有順)

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝

浄土 五十九巻 四月特大号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成五年三月二十五日

発行 平成五年四月一日

編集人 牧田諦亮

発行人 宮林昭彦

印刷所 文化カラー印刷株式会社

写植印字 文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三四三六)三三五一

結局、 黒ラベル。

いつでも・どこでも・誰とでも……

楽しく飲める〈黒ラベル〉。



サッポロ〈**生**〉黒ラベル

人間のやさしさをクルマに。

すっきりが、いい。

新しいローレルと、日本。



Photo: ローレル 25 ツインカムメダリスト (オプション装着車)

松方は、**こ**りゃあいいと思った。

◎ 本木は、**な**るほどと感心した。

◎ 松方・本木のローレル評判記。LAUREL 誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。 本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカムメダリスト 全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(6気筒ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オゾンセーフフルオートエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは同条件で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823 お近くのローレル販売会社へ